

---

# 調査年報 15

---

平成 14 年度

---

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

---

# 調査年報 15

---

平成 14 年度

---

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



森町 倉知川右岸遺跡 縄文時代後期前葉の配石遺構



根室市 穂香堅穴群 縄文時代後期初頭の焼失堅穴住居跡



千歳市 オルイカ2遺跡 平地住居跡（アイヌ文化期 柱穴を紐でつないだ状況）



森町 森川3遺跡 近世の畑跡（調査区を横断する浅い溝が並ぶ）

# 目 次

平成14年度の調査	
1 調査の概要	1
2 調査遺跡	4
オルイカ 1 遺跡	4
オルイカ 2 遺跡	6
対雁 2 遺跡	10
浜厚真 3 遺跡	18
米原 4 遺跡	22
宮戸 4 遺跡	25
穂香竪穴群	28
白滝遺跡群	32
旧白滝 8 遺跡	34
旧白滝 9 遺跡	34
下白滝遺跡	34
白滝遺跡群の整理	40
濁川左岸遺跡	42
本茅部 1 遺跡	46
倉知川右岸遺跡	48
森川 3 遺跡	52
石倉 1 遺跡	54
野田生 1 遺跡	56
落部 1 遺跡	58
本内川右岸遺跡	59
キウス 4 遺跡	60
ユカンボン C15 遺跡	62
西島松 5 遺跡	64
3 現地研修会の記録	66
現地研修会の概要	66
苫東埋文調査の顛末（佐藤一夫）	68
馬追丘陵における1960年前後の遺跡調査（野村 崇）	78
4 研修・研究会等	82
5 平成14年度資料の貸出	84
6 平成14年度刊行予定報告書	86
7 組織・機構	87
8 職員	88

## 北海道史略年表

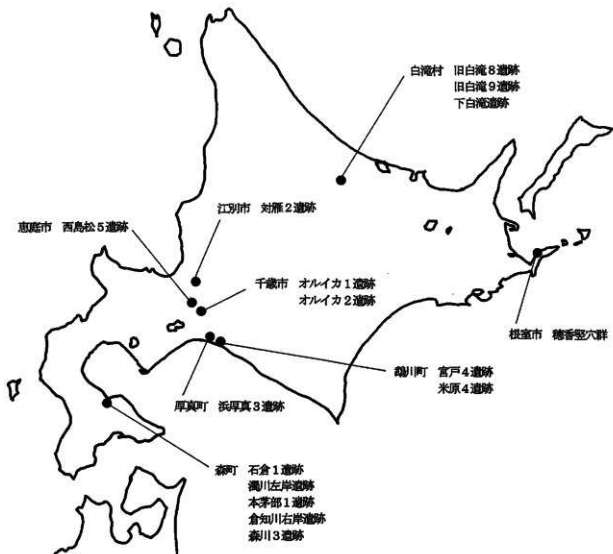
本州の時代区分	年代(西暦)	北海道の時代区分	平成14年度調査遺跡の主な時期
明治～平成		(近代、現代)	
江戸時代	A.D.1900	近世	オルイカ1 オルイカ2 森川3
室町時代	A.D.1600	アイヌ文化期	
鎌倉時代	A.D.1200	中世	
平安時代		縄文時代	穂香整穴群 宮戸4 西島松5
	A.D.800	オホーツク文化期	
奈良時代		統縄文時代	石倉1 旧白滝8
古墳時代	A.D.400		
弥生時代			
	B.C.300	縄文時代	穂香整穴群 対雁2、オルイカ1、オルイカ2 西島松5
晩期		晩期	
	B.C.1000	後期	西島松5 倉知川右岸 濁川左岸、宮戸4、オルイカ1
後期		後期	
	B.C.2000	中期	浜厚真3、下白滝、穂香整穴群 宮戸4、米原4、オルイカ2、西島松5
中期		中期	
	B.C.3000	前期	本茅部1、濁川左岸、倉知川右岸 森川3
前期		前期	
	B.C.4000	早期	宮戸4、西島松5 宮戸4、浜厚真3
早期		早期	
	B.C.7000	草創期	穂香整穴群
草創期		草創期	
	B.C.10000		
	B.C.12000	旧石器時代	オルイカ2
旧石器時代			
	B.C.20000		
	B.C.30000		

アイヌ文化期 平地住居跡がオルイカ1遺跡(1)、オルイカ2遺跡(7)で検出されている。オルイカ2遺跡では、焼土を伴う住居(チセ)のまわりに杭列が想定されるところもある。さらに柱穴の分布状態を見ると倉庫(ブ)、小熊の檻(ヘベレセツ)、便所(アシシル)なども推定可能かと思われる。

倉知川右岸遺跡で「溜め糞?」とあるのは、駒ヶ岳火山灰d層よりも下層から出土した、小動物の骨片を多く含む灰白色のものである。同じく駒ヶ岳火山灰d層よりも下層から検出されたものに森川3遺跡の烟跡がある。調査区のほぼ全面に検出されており、16世紀前後の時期を推定している。

#### 継続整理・報告書作成

平成10年度に発掘を終了し、整理を進めてきたキウス4遺跡、ユカンボシC15遺跡の作業は、最終年度である。キウス4遺跡は10冊目、ユカンボシC15遺跡は6冊目の報告書を刊行することになる。野田生1遺跡、落部1遺跡、本内川右岸遺跡は前年度に発掘を終えたものである。対雁2遺跡、西島松5遺跡、白滝遺跡群については、それぞれ膨大な資料群の整理が今後とも継続されることとなる。



## 2 調査遺跡

### オルイカ1遺跡 (A-03-88)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央2530-5・6、2533-3・4

調査面積：5,460m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年5月7日～10月25日

調査員：佐川俊一、末光正卓、富永勝也

### 遺跡の概要

遺跡は、千歳市街の北東約5.5km、馬追丘陵の西側の麓、千歳川水系により形成された上位段丘（現地表標高約13m）上に立地する。調査区の北東を河川改修されたオルイカ川が流れている。かつては「キウス13号周堤墓」として周知されていたが、平成13年に北海道教育委員会が行った試掘調査の結果、周堤墓が存在しないことが明らかとなり、「オルイカ1遺跡」という名称に変更された。

この試掘調査で、本遺跡のオルイカ川左岸部分は、発掘調査部分（3,900m<sup>2</sup>）と工事立会部分（2カ所 合計1,560m<sup>2</sup>）に分けられた。発掘調査の早い段階で、工事立会の部分も遺構・遺物の存在が確認されたので、これらも合わせて発掘調査を行うことになり、最終的に調査面積は5,460m<sup>2</sup>となった。調査区は大まかに南東から北西側に大きく傾斜しており、北西側（低地部）は現地表から約1m掘り下げると水が湧く。東側は土層の状態から大きく削平されたと考えられる。

### 遺構と遺物

遺構・遺物は、いずれも樽前C降下軽石層（Ⅳ層）の上位の「Ⅲ層」、下位の「Ⅴ層」と呼称した黒色土から多く確認された。Ⅴ層下位の漸移層（Ⅵ層）出土の遺物は少ない。

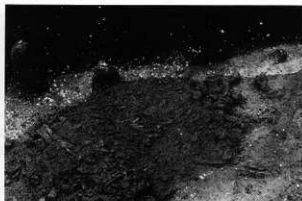
Ⅲ層の主な遺構としては、アイヌ文化期の平地住居跡（USD-1）が1軒確認され、鉄器や礫類が出土した。包含層出土の遺物は、すべて縄文時代晩期後半のものである。Ⅲ層の遺構・遺物は、調査区の南側にしか存在しなかった。

Ⅴ層では縄文時代の竪穴住居跡（LPD-1～6）や土坑等が確認された。住居跡は、余市・タブコブ式の土器片を用いた土器囲い炉をもつもの（LPD-1・4～6）と、炭化材が多量にみられたもの（LPD-2・3）がある。後者は、現在のところ明確な時期は不明である。包含層出土の遺物は、縄文時代後期初頭が主体的で、他の時期の遺物は極めて少ない。多くが低地部以外からの出土である。

詳細な集計作業は行っていないが、現時点での遺物の出土点数は、土器12,885点、剥片石器群3,688点、磨製石器群110点、礫石器群1,191点、その他（鉄器等）11点である。



道跡1確認状況（南から）



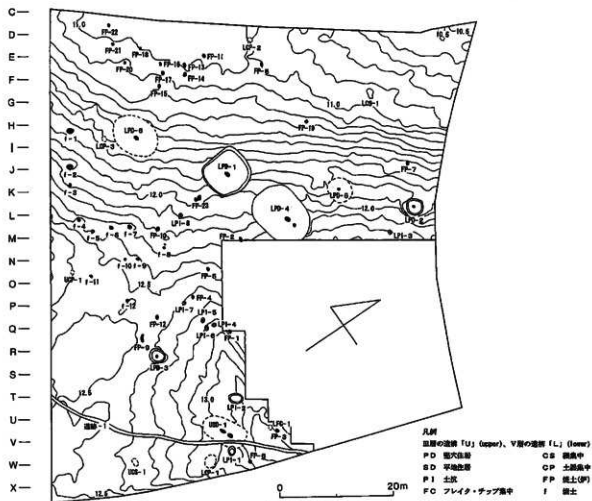
竪穴住居跡（LPD-2）炭化材確認状況





遺跡位置図 (この図は国土院発行5万分の1地形図「国産」を使用したものである)

35 38 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55



遺構位置図

## オルイカ2遺跡 (A-03-280)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央2536

調査面積：3,230m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年6月24日～10月25日

調査員：佐川俊一、和泉田毅、阿部明義

### 遺跡の概要

遺跡は千歳市街地から北東に約6km、オルイカ1遺跡の北東約400m、馬追丘陵裾部にある。調査区は標高12～15mほどの緩斜面上にあり、地層に大きな変化はないが、下位の層位で風倒木が多い。主な遺構と遺物は下記の通りで、特にアイヌ文化期の住居群（コタン）の跡がうかがえる遺跡である。また、札幌型細石刃核を含む白滝産黒曜石の旧石器ブロックが検出された遺跡でもある。

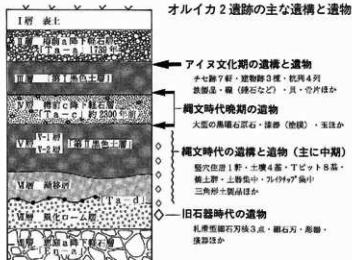
### 遺構と遺物

遺構は平地住居跡7軒、建物跡3棟、杭列4、単独の柱穴16基、焼土21ヵ所（以上アイヌ文化期）、竪穴住居跡1軒、土壇4基、Tピット8基、焼土84ヵ所（以上縄文時代）を検出した。平地住居（チセ）跡には、20cm程度の厚みを持った炉があり、焼土と灰が重なっている。その周囲から柱穴が10～30本検出されている。建物跡はやや太い柱穴で構成されており、倉庫などを想定している。

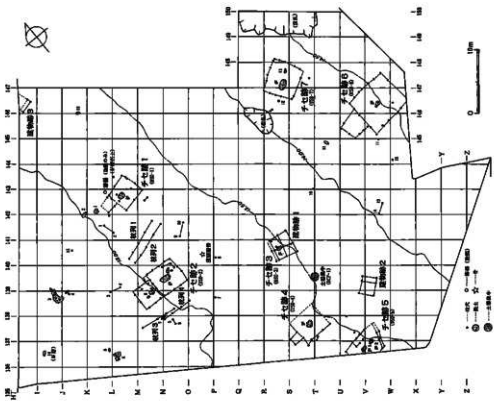
遺物は土器等10,259点、石器等8,631点、金属製品12点、合計18,902点出土した。遺跡出土土器の主体時期は中期半ば（葎ヶ岡2式～天神山式）で、中期後半～後期初頭（北筒式～余市式）、晩期後葉（タンネトウ式）も多く、その他に早期後半の土器が少数出土している。石器等では、錘石や火打石と考えられるアイヌ文化期の小礫が約100点、白滝産とみられる茶色味の強い黒曜石が主体の旧石器遺物が約750点のほか、縄文晩期の所産とみられる大型の黒曜石原石などが出土した。旧石器時代の遺物は札幌型細石刃核3点、細石刃100点以上、彫刻刀形石器や搔器が少数出土した。黒曜石原石は長さ30～35cm、重さ2.5kg前後の角柱状のものが2本並んで出土した。金属製品は刀子などの鉄製品と銅片が出土した。また漆器が出土したが、赤漆の塗膜のみが残っていた。このほかアイヌ文化期を主体に獣骨・魚骨・炭化材などの自然遺物も出土している。



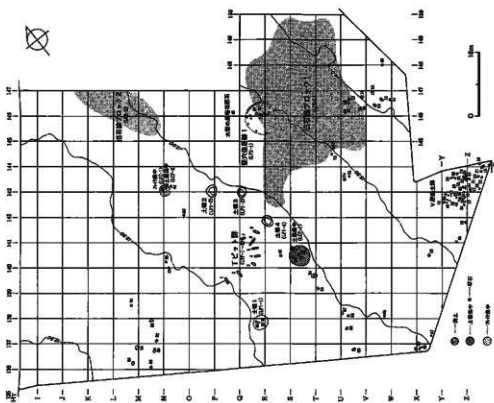
オルイカ2遺跡と周辺の遺跡



基本土層



遺構位置図 (1) Ta-c以上  
※地形は皿層上面



遺構位置図 (2) Ta-c以下  
※地形は皿層上面

対雁 2遺跡 (A-02-110)

事業名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局石狩川開発建設部

所在地：江別市工業町地先（石狩川河川敷緑地内）

調査面積：3,450m<sup>2</sup>（昨年度下層部分1,500m<sup>2</sup>、今年度着手部分1,950m<sup>2</sup>）

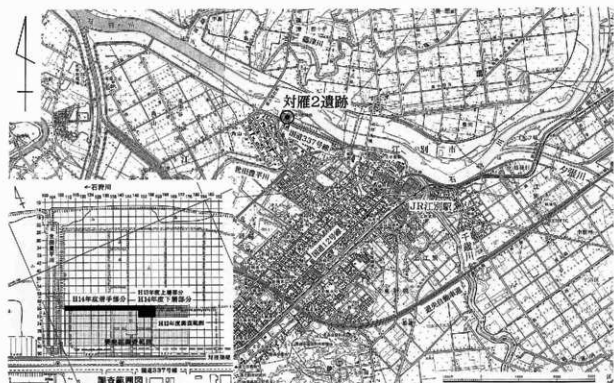
発掘期間：平成14年5月7日～10月31日

調査員：鈴木 信、西脇対名夫、吉田裕吏洋、酒井秀治

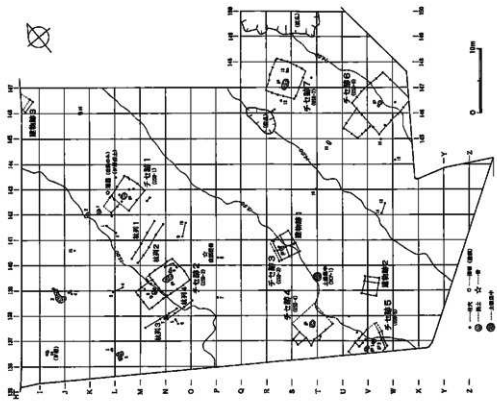
遺跡の概要

遺跡はJR江別駅の北西約4kmの石狩川左岸に位置する。世田豊平川(旧豊平川)との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約8mの自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する1970年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

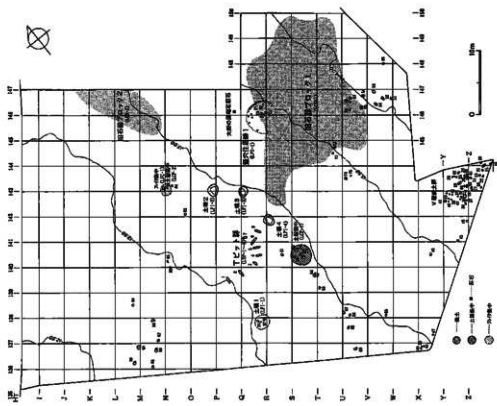
遺跡調査の4ヵ年目にあたる。今年度は昨年度調査区の下層部分1,500m<sup>2</sup>と今年度着手部分として遺跡の北側部分1,950m<sup>2</sup>（195m×10m）、合計3,450m<sup>2</sup>の調査を行った。今年度着手部分については遺跡の要発掘面積が西側に広がったことおよび昨年の調査によって層位が見直されたことから東西方向の層位確定と遺構・遺物の分布の確認を目的として調査を行った。遺物包含層は世田豊平川(旧豊平川)へ向かって落ち込んでいき、現地表面から約2.5m下の標高6m付近まで洗掘を免れた生活面が検出されている。また、地層確認のための深堀りでは標高2～4m付近の低い位置から土器片や石器等が少量出土している。13年度着手範囲の遺物は縄文晩期後葉のものであるが、今年度着手範囲においては続縄文土器が少量出土している。遺跡は縄文晩期後半～続縄文後半にかけて形成されたと考えられる。



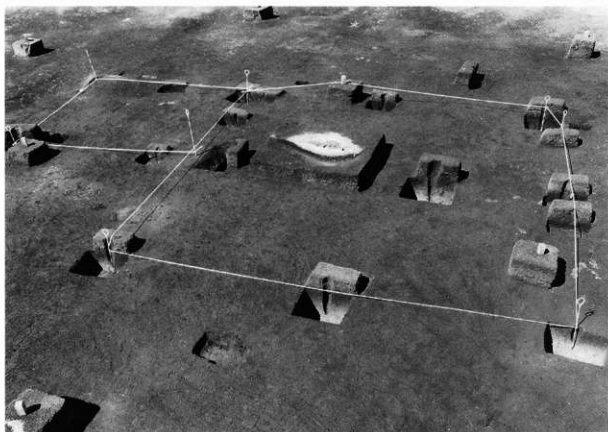
遺跡の位置



遺構位置図 (1) Ta-c以上  
 地形図は10層上面



遺構位置図 (2) Ta-c以下  
 地形図は10層上面



平地住居跡 (アイヌ文化期)



建物跡 (アイヌ文化期)



大型の黒曜石原石出土状況



竪穴住居跡（縄文時代中期）



旧石器出土状況（ブロック1）



札滑型細石刃核出土状況



彫器出土状況

## 対雁 2 遺跡 (A-02-110)

事業名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局石狩川開発建設部

所在地：江別市工業町地先（石狩川河川敷緑地内）

調査面積：3,450m<sup>2</sup>（昨年度下層部分1,500m<sup>2</sup>、今年度着手部分1,950m<sup>2</sup>）

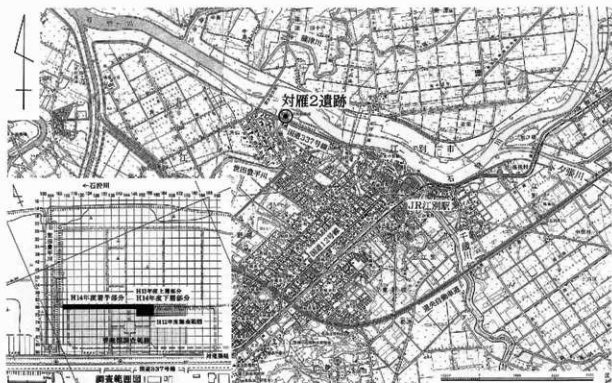
発掘期間：平成14年5月7日～10月31日

調査員：鈴木 信、西脇対名夫、吉田裕史洋、酒井秀治

## 遺跡の概要

遺跡はJR江別駅の北西約4kmの石狩川左岸に位置する。世田豊平川(旧豊平川)との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約8mの自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する1970年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

遺跡調査の4ヵ年目にあたる。今年度は昨年度調査区の下層部分1,500m<sup>2</sup>と今年度着手部分として遺跡の北側部分1,950m<sup>2</sup>（195m×10m）、合計3,450m<sup>2</sup>の調査を行った。今年度着手部分については遺跡の要発掘面積が西側に広がったことおよび昨年の調査によって層位が見直されたことから東西方向の層位確定と遺構・遺物の分布の確認を目的として調査を行った。遺物包含層は世田豊平川(旧豊平川)へ向かって落ち込んでいき、現地表面から約2.5m下の標高6m付近まで洗掘を免れた生活面が検出されている。また、地層確認のための深堀りでは標高2～4m付近の低い位置から土器片や石器等が少量出土している。13年度着手範囲の遺物は縄文晩期後葉のものであるが、今年度着手範囲においては統縄文土器が少量出土している。遺跡は縄文晩期後半～統縄文後半にかけて形成されたと考えられる。



遺跡の位置

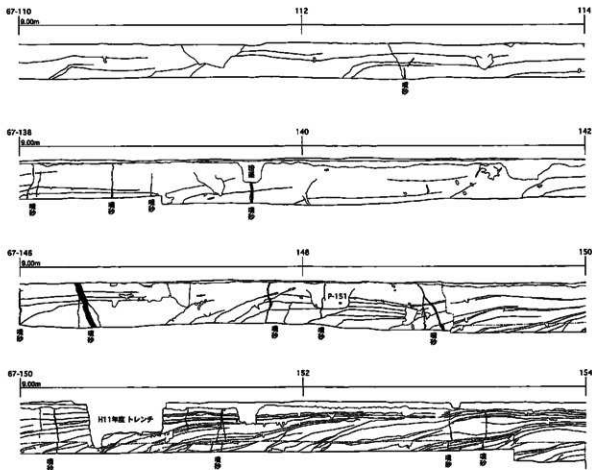


## 遺構と遺物

昨年度調査区の下層部分では引き続き多くの遺構・遺物が検出されたが、今年度着手した遺跡の西側では148ライン付近の土坑や140～146ライン付近に焼土が多く見られるほかは、焼土が点在するだけであった。また、遺物は昨年度調査区に比べ非常に少なかった。

今年度に検出された遺構は土坑33基、焼土246ヵ所、集石3ヵ所などである。平成11年度のトレンチ調査・平成13年度の上層部分の調査で検出したものを含めると、土坑135基、焼土795ヵ所、集石11ヵ所などとなる。土坑は礫・礫石器や砂の混入した灰白色の粘土が入っているものがあつたが、多くは遺物を伴わない。明確に基坑と判断されるものはなかった。形状は円形や楕円形、規模は直径1.7m・深さ0.6mほどの大型のものから直径0.2m・深さ0.1mほどの小型のものが検出された。土坑は南北方向に分布が拡がり、146・156・158ライン付近に集まって検出される傾向が観察されている。焼土は炭化物や骨片などを伴うものや廃棄されたようなものが検出された。また、焼土の周囲に土器を据えるためと考えられる浅い小穴を伴うものも検出された。

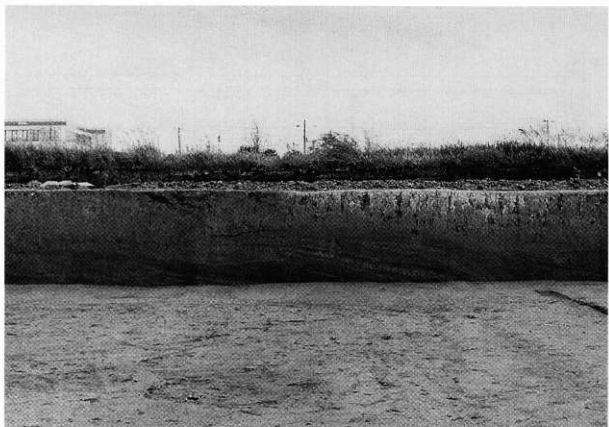
今年度に出土した遺物は平成14年末現在の集計で土器等2,916点、石器等9,952点、合計12,868点である。平成11・13年度の出土品を含めた今年度報告範囲の遺物総数は土器等34,015点、石器等20,042点、合計54,057点となる。土器は縄文晩期後半～統縄文後半に属するものである。石器は石鏃、スクレイパー、たたき石・台石が多く、ナイフ、石斧などが少量出土している。石器等の石材としては、剝片石器が黒曜石、礫石器では安山岩や砂岩が多い。



東西方向土層断面図 (抜粋)



調査風景（南東から）



地層断面（南東から）



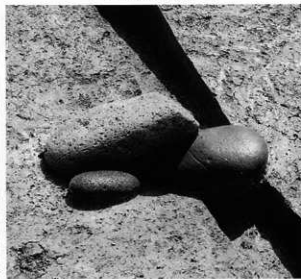
F-914・919・922断面 (北東から)



P-138・139・140調査風景 (南西から)



P-123断面 (南東から)



S-20検出状況 (北から)

### 土器集中1の整理作業について

土器集中1はV群C類土器・石器・炭化物・焼獣骨片が大量に集積されていた。調査は平成11～12年度にかけて行われ、今年度から整理を開始した。遺物の内訳は土器片68,075点、焼成粘土塊1点、石器・石器類5,954点、フローテーション済み資料9箱（サンコーサンボックス#36-2B）である。なお、復元土器のごく一部が平成11年度『江別市 対雁2遺跡(1)』に報告済みである。

土器は破片接合、石膏復元（2002年10月30日現在、約90個体復元了、深鉢約60個体・浅鉢約30個体）、復元土器台板製作、擬口線観察とその細部撮影、接合関係の把握（垂直方向・水平方向）と垂直分布図・水平分布図の作成を行う。また、擬口線の形成に関して奈良文化財研究所 深澤芳樹氏の指導を受けた。以下に遺構図と土器図の一部を掲載し、これまで得られた知見を述べる。

### 土器集中1とは

本遺構はII-1層上面で検出されたが、II-1層は耕作・河川緑地造成によって約1m削平を受けているので、本来はII-1層下部に位置する遺構である。1～7層に分層される。堆積断面を見ると南北方向はほぼ水平に堆積している。上部は遺物を含む1・2層、遺物をほとんど含まない3層（II-1層）、下部は5層という層序である。東西方向は南北方向に較べて複雑な堆積を示している。上部は遺物を含む1・2層、遺物をほとんど含まない3・4層（II-1層）、下部は5～7層という層序である。

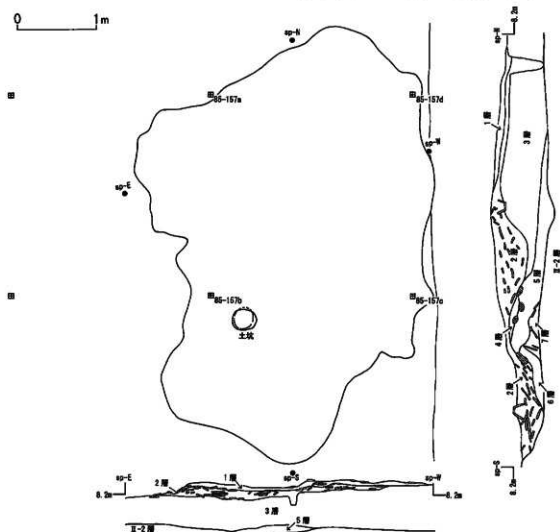


図3 土器集中1

## 土器について

〈胎土〉土器集中1の土器の胎土はほとんどが「1」：石英・長石・角閃石と径1mm以下の泥岩・軽石を含む胎土であり、それに風化の著しい泥岩粒（被熱すると赤褐色に発色する）や土器片・繊維？を加えるものがあつた。「2」：石英・長石角閃石・軽石を多く含む非常に粗い胎土は2個体のみである。

〈成形〉粘土紐接合面は外傾である。

〈口縁～胴部の形態〉倒円錐台形の器形は、深鉢（器高：口径＝1：1.25>）、鉢（器高：口径＝1：1.25～1.50）、浅鉢（器高：口径＝1：1.50<）。倒円錐台形以外の器形は壺、広口壺、台付鉢、舟形土器がある。深鉢は口縁部に対して底部が傾きをもつために自立しない個体が多い。また、器高30cm以上の個体は口縁部上面観が楕円形に歪むものが多い。

〈底部の形態〉凸平底の底径は7cm未満の小さい個体が多い。平底の底径は9cm以上あって、凸平底に較べやや大きい。

〈調整〉深鉢・鉢・浅鉢の外表面は弱いナデ。内面はタテナデ→ヨコナデ、外表面よりも強いナデで、ナデ幅が明瞭に観察できる。壺の内面調整は鉢類に較べて粗い調整である。

〈施文方法〉ほとんどが直描き文である。有文深鉢は下地を整える手順を踏まず、縄文の上から施文される。体部上半に屈曲部をもつ有文鉢・浅鉢は縄文をナデ消して描く直描き文の個体がある。

〈文様〉主文様には平行沈線文の他に、弧沈線文（交互弧沈線、並列弧沈線、対向弧沈線）、三角形沈線文（交互三角形沈線、並列三角形沈線、対向三角形沈線、背反三角形沈線があり、並列三角形沈線・交互三角形沈線・対向三角形沈線は「交点」をネガ部・管状刺突で表現する）、菱形沈線（並列菱形沈線）がある。分断文様は集合する蛇行線文がある。副文様には短沈線・短弧沈線がある。

〈胴部の縄文〉胴部に施される縄文原体はRLの原体が多い。回転方向は斜位縦走が多い。縄文押捺の単元は施文幅がやや広く転写距離が比較的短い。また、口縁部に幅狭の横位斜走、それより下部にやや幅広の斜位縦走がみられる個体もある。

〈底部の文様〉深鉢底部に施される文様はRL縄文とナデがある。凸平底にはRL縄文、平底にはナデが施される個体が多い。

〈二次被熱〉器高30cm以下深鉢は胴部1/2下半～全面に赤色化が見られる。器高30cm以上の深鉢は胴部1/3下半赤色化が見られ、器高35cm以上の深鉢にはさらに外底辺から上方5cmのあたりに軽1～2cmの黒色化帯が胴部をめぐる個体がある。この黒色化帯は炭化物の付着ではなく、器体内部に及んで（断面でいうと内外面の中間部）内面側器壁には及んでいない。

## 石器等について

剝片石器は凹基の三角鏃、スクレーパー、ナイフなどがあり、礫石器は石斧、たたき石がある。そのほかには琥珀片・石炭がある。

## 土器集中1の時期

出土した土器から縄文時代晩期後葉の後半にあたる。変形工字文由来の三角形沈線文があることから大洞A式に並行し、菱形沈線文の取り扱いによっては砂沢式にも並行する可能性がある。

鈴木信「道央部における晩期後葉の土器編年」『江別市 対雁2遺跡(3)』（北海道埋蔵文化財センター 2002）の時期分類に当てはめればV・VI期である。IV・V期が主体の土器集中3はA.M.S.を用いた補正<sup>14</sup>C年代測定で2500±40y.B.P.～2430±40y.B.P.と測定されているので、土器集中1はそれよりも新しい測定値が予想される。

いづれにしても当該期の資料は少なく、土器集中1のように出土量が多く一括性が高い資料はない。慎重な取り扱いが必要である。この遺構の時間の幅を明らかにするのが当面の課題である。

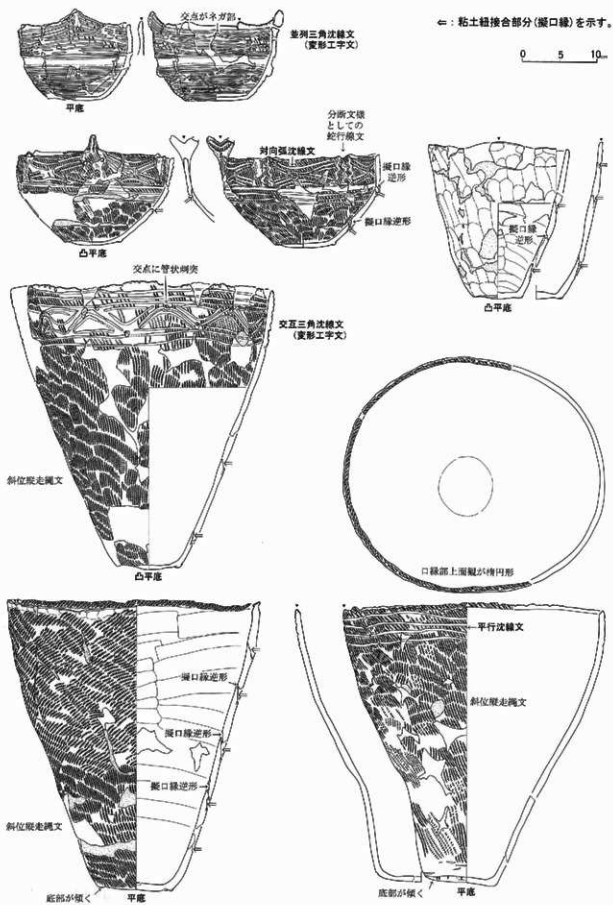
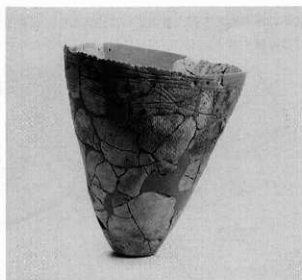
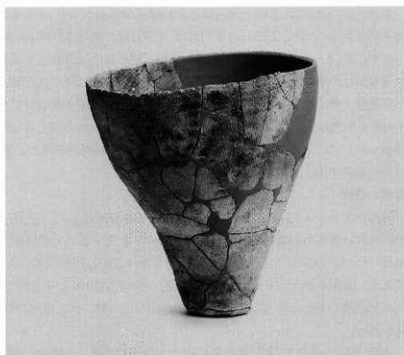


図4 土器集中1の土器



土器集中1の土器

## 浜厚真3遺跡 (J-13-72)

事業名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所在地：勇払郡厚真町字浜厚真525番地-3ほか

調査面積：3,390m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年7月29日～10月25日

調査員：達藤香澄、鎌田 望、中田裕香、笠原 興、芝田直人、山中文雄

### 遺跡の概要

遺跡は厚真町の南西部、浜厚真地区にある。現海岸線から2km程内陸の台地縁辺部（標高4～12m程）に位置する。今回の発掘調査によって、173基のTピットが検出された。

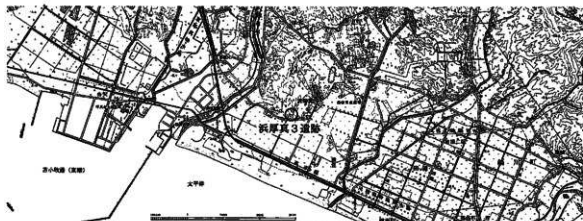
調査区内の地形は、北側と南西側に台地縁辺の斜面があり、その鞍部から北側の斜面を巻くように、ほぼ平坦な面が広がる。Tピットの多くはこの平坦な面で検出された。南東側は泥炭の堆積する低湿地である。

基本土層（I～X）のうち、遺構・遺物に関わるのはⅢ層とⅤ層の黒色埴土である。両層間にみられるⅣ層は土壌化した樽前C火山灰の可能性が高い。Ⅲ層には白頭山-苫小牧火山灰が斑状に堆積し、その上位で焼土1ヶ所が検出された。Ⅴ層は南西側斜面と平坦面でVa、Vb、Vcの3層に分層された。Va層は黒色埴土で、Tピットを掘り込んだ層とみられる。Vb層は褐色砂埴土で、支笏降下軽石（Spfa-1）の二次堆積層の可能性が高い。Vc層は黒褐色埴土で、焼土13ヶ所が検出された。縄文時代早期の遺物が出土している。

### 遺構と遺物

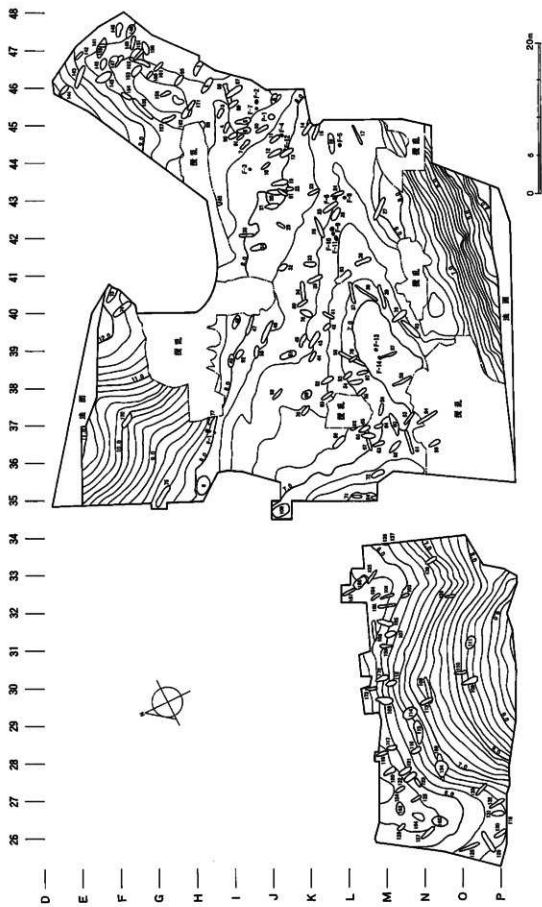
遺構はTピット173基、土坑1基、焼土14ヶ所を検出した。Tピット（TP1～173）は、溝状、楕円形、杭穴のあるもの等があり、厚真川を挟んで位置する「苫東遺跡群」で報告された形跡がみられる。土坑（P-1）はTピットと似た確認状況であったが、円形で浅いためTピットと認定しなかったものである。Ⅲ層の焼土（F-1）は、白頭山-苫小牧火山灰より上位で検出したことから、擦文時代～アイヌ文化期のものであろう。Vc層の焼土（F-2～14）は、層位や周囲の遺物から縄文時代早期の可能性が高い。

遺物は約3,000点で、Vc層からの出土が大半である。土器は1,000点程で、その多くは縄文時代早期の東釧路Ⅱ式に相当する。その他の東釧路式系や、縄文時代後期前葉・末葉、同晩期前葉、縄文時代後半のものもあるが、数点ずつに過ぎない。石器等は黒曜石のフレイク・チップが多い。定型的な石器では石鏃やスクレイパーが目につく。石斧やたたき石、ナリ石等のごく僅かである。



遺跡位置図





遠境位置圖



遺跡遠景（南西から）



遺跡究掘（西から）



TP-82断面 (東から)



TP-99完掘 (南から)



TP-97完掘 (南から)



TP-88完掘 (西から)



TP-170杭跡断面 (南西から)

## 米原4遺跡 (J-14-42)

事業名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所在地：勇払郡鷓川町字米原400-5ほか

調査面積：975m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年5月7日～7月26日

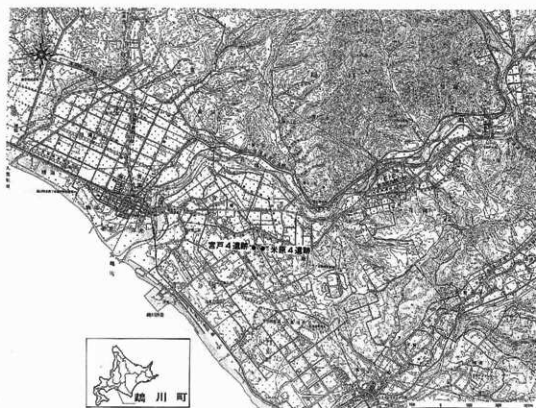
調査員：遠藤香澄、鎌田 望、中田裕香、笠原 興、芝田直人、山中文雄

### 遺跡の概要

遺跡はJR鷓川駅の東南約5kmに位置する。一級河川鷓川の支流であるイモッペ川の両岸、標高15～30mほどの河岸段丘とそれに続く氾濫原に立地している。右岸が米原4遺跡、左岸が宮戸4遺跡である。この地域の遺跡調査は平成12年度に始まり、今年度は3ヵ年目である。

米原4遺跡は、平成12年度に町道米原1号の北側をA地区、南側をB地区として計2,311m<sup>2</sup>を調査した。遺構は、縄文時代中期後半、柏木川式期の住居跡6軒のほか、土壇4基、Tピット7基、焼土13カ所、石囲い1カ所が検出された。調査結果は『鷓川町 米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡』（北埋調報153）で報告済みである。

今年度、米原4遺跡は平成12年度調査範囲（B地区）の周縁を調査した。当初の計画では、イモッペ川を臨むクリアランス部分（400m<sup>2</sup>）、昨年度に道教委文化課の試掘により包蔵地と判明した北東側の町道米原11線下と牧草地（1,200m<sup>2</sup>）の計1,600m<sup>2</sup>を調査する予定であった。しかし、調査中に工事計画の変更により町道下部分が範囲から除外され、最終的な調査面積は975m<sup>2</sup>となった。



遺跡位置図

この図は国土地理院発行の地形図、1：50,000「富川」(NK-54-9-13、昭和63年3月30日発行)と、鷓川町役場の1：50,000「鷓川町全図」(承認番号 平10、道復 第874号)を合成したものである。

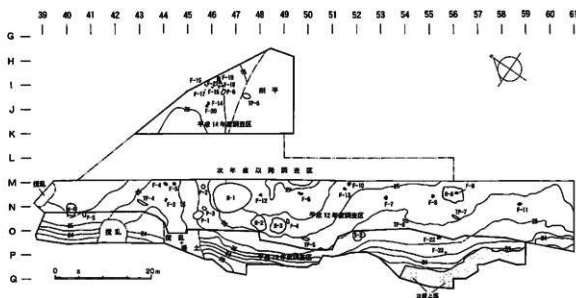
平成14年度は、米原4・宮戸4遺跡の本年度調査分と、これまで未報告であった平成12年度の宮戸4遺跡S地点調査分を併せて、『米原4遺跡(2)・宮戸4遺跡(2)』として報告する。

基本土層は両遺跡で共通しており、地表面から、I：表土・耕作土、II：樽前a、樽前bおよび有珠b降下火山灰、III：黒色腐植土（局地的に白頭山-苫小牧火山灰を含む）、IV：褐色土（一部は土壌化した樽前c降下火山灰）、V：黒褐色腐植土、VI：漸移層、VII：支笏降下軽石の風化ローム、VIII：支笏降下軽石または円礫層となっている。遺物包含層は主にIII～V層およびVI層の上面である。

#### 遺構と遺物

今年度、住居跡1軒、土壇2基、Tピット1基、焼土9ヵ所、集石1ヵ所が検出された。住居跡は平成12年度に検出されたH-4の南西側未調査部分である。床面より集中して出土し、報告書に掲載した復元土器と同一個体の土器片が得られた。平成12年度出土分と接合して、改めて今年度報告する予定である。これらの遺物から、H-4は縄文時代中期後半、柏木川式期の遺構と考えられる。また、平成12年度検出のH-5は、今年度の調査の結果、風倒木痕を誤認したものであることが判明した。このため、H-5は欠番となり、現在のところ米原4遺跡で検出された住居跡は5軒ということになる。TP-8は、これまで検出されたものが沢地形内部に立地するのは異なり、尾根の高い部分に掘り込まれている。焼土は上面に土器片やフレイクなどの遺物や炭化物を伴うものが多い。集石には被熱した礫・礫片が含まれている。

遺物は土器約3,000点、石器等約4,400点、合計で約7,400点が出土した。これらの大部分は、イモツベ川へ向かう沢筋より出土している。土器は、縄文時代早期後半の東剣路Ⅲ式、コックロ式、中茶路式、東剣路Ⅳ式、同前期前半の網文式、同前期後半の植苗式、同中期前半の円筒上層式、同中期後半の天神山式、柏木川式、北筒式、同後期前葉の余市式、タブコブ式、同晩期末葉～縄文時代初頭の可能性のある土器などが出土した。このうち最も多いのが中期後半の土器である。石器等もこれらの時期の所産と考えられる。礫・礫片が大半を占めており、黒曜石製のフレイクが次ぐ。定型的な石器は少ないが、石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、砥石などが出土した。全体的な傾向として礫石器が少なく、特にたつき石や台石は出土していない。



米原4遺跡 遺構位置図



遺跡遠景（南から）



H-4（東から）



S-2（東から）



H-4遺物出土状況（東から）



TP-8（北東から）

## 宮戸 4 遺跡 (J-14-40)

事業名：日高自動車道厚真門別道路工用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所在地：勇払郡鷯川町字宮戸180-1、字米原404ほか

調査面積：4,550m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年5月7日～8月28日

調査員：遠藤香澄、鎌田 望、中田裕香、笠原 興、芝田直人、山中文雄

### 遺跡の概要

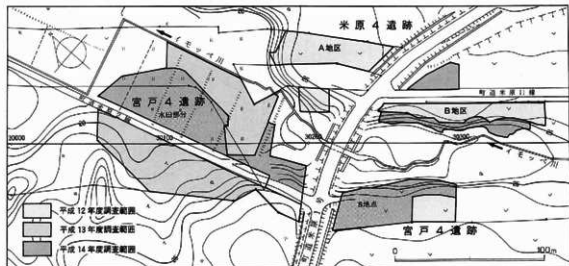
宮戸 4 遺跡は平成12年度、町道米原 1 号の南側 (S 地点)、600m<sup>2</sup> を調査した。平成13年度は、町道米原 2 線に接した斜面部分およびイモッペ川の改修区域の計5,310m<sup>2</sup> を調査した。昨年度調査分は『鷯川町 宮戸 4 遺跡』(北埋調報168)として報告した。昨年度までに、遺跡全体で住居跡1軒、Tピット18基、焼土26ヵ所、フレイク・チップ1ヵ所、集石1ヵ所が検出されている。

今年度は、S 地点の平成12年度調査範囲に接する部分 (1,200m<sup>2</sup>)、北側の平成13年度調査範囲に挟まれた町道米原 2 線下と水田部分 (3,500m<sup>2</sup>)、および北側の樹林部分 (1,300m<sup>2</sup>) の計6,000m<sup>2</sup> を調査する予定であった。しかし、調査中に工事計画の変更がなされ、町道米原 2 線現道下と樹林部分が調査範囲より除外された。このため最終的な調査面積は4,550m<sup>2</sup>となった。

### 遺構と遺物

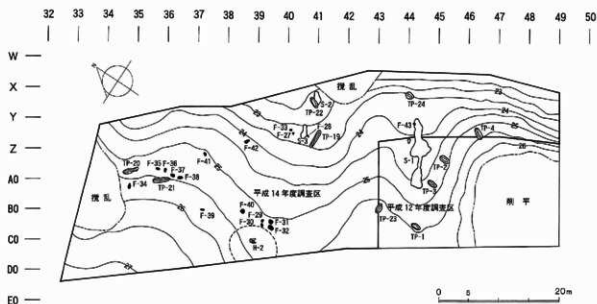
遺構は住居跡1軒、Tピット8基、焼土19ヵ所、集石4ヵ所を検出した。これらの大部分はS地点に存在する。住居跡(H-2)は掘り込みが明瞭ではなく、土器囲い炉と柱穴のみが検出された。使用されている土器は、縄文時代後期前葉のタブコブ式に相当する時期のもので、5個体分の破片が浅く掘り窪めた穴の壁面に貼り付けるように廻っている。炉の内側は非常に強く焼けており、黒曜石製の石槍1点のほか、多量のフレイク・チップが出土した。Tピットは昨年度まで検出のものと同様に沢地形を意識して作られている。焼土は大部分がV層下位～VI層上で検出されており、周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代前期前半の時期に形成されたものが多いと考えられる。集石は平成12年度検出のS-1の続きを調査した。大半の礫・礫片が被熱している。また、イモッペ川の旧河道が水田部分で確認された。上部の堆積状況などから、縄文時代後～晩期のころまでの河道と推測される。

遺物は、土器約12,800点、石器等約15,500点の計約28,300点が出土した。このうち約70%がS地点よ

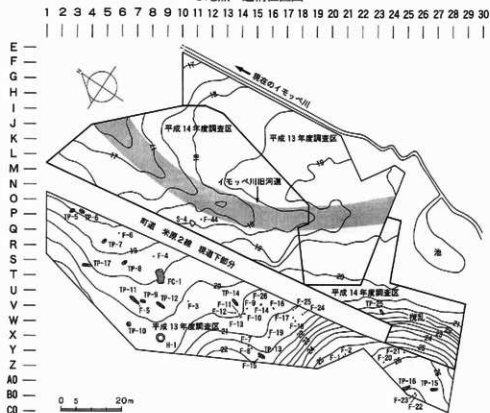


年度別調査範囲と周辺の地形

り出土している。土器は縄文時代早期後半の東剣路系、同前期前半の綱文式、静内中野式、同中期後半の天神山式、柏木川式、北筒式、同後期前葉の余市式、タブコブ式、同晩期後葉のタンネットウシ式、擦文時代のものが出土している。このうち最も多いのは、縄文時代前期前半の土器群で、早期後半のものが次ぐ。石器等は礫・礫片が約50%、フレイク・チップが約40%を占める。定型的な石器は非常に少ないが、石鏃、つまみ付ナイフ、スクレイパーの多い点が注目される。また、蛇紋岩製と考えられる勾玉1点が、水田部分で出土した。



S地点 遺構位置図



水田部分 遺構位置図





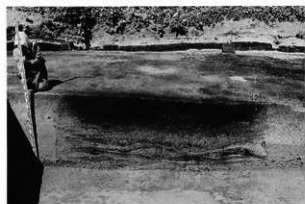
イモッペ川旧河道調査風景 (南から)



H-2土器窯 (南から)



S-1 (南西から)



TP-21セクション (南西から)



勾玉出土状況 (西から)

## 穂香 竪穴群 (N-01-34)

事業名：一般国道44号根室道路工事に伴う穂香竪穴群発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部

所在地：根室市穂香175ほか

調査面積：7,150m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年5月7日～10月31日

調査員：越田雅司、愛場和人、広田良成

### 遺跡の概要

穂香竪穴群は根室市中心部から南西に約5km、第二ホニオイ川左岸の標高9～13mの西から東に張り出した舌状台地上にある。遺跡の北約500mには根室湾がひろがり、気象条件がよいと知床半島や国後島を望むことができる。調査前の状況は牧草地と笹原の原野で、縄文時代などの遺構と考えられる凹みが地表面で確認できた。周辺には第二ホニオイ川支流の対岸に穂香3竪穴群、南西の海岸段丘に帆茂尻東竪穴群、帆茂尻ポントマリ竪穴群があり、市街地方向へ1.5km程行った台地上に国指定史跡西月ヶ岡竪穴群がある。平成5年度の根室市教育委員会の発掘調査では5軒の竪穴が発見され、同時に行われた竪穴の分布調査では遺跡全体で62ヵ所の凹みが確認された。当センターの調査区は遺跡の西側にあたり、昨年は8,000m<sup>2</sup>、今年度は7,150m<sup>2</sup>の調査を行った。昨年度の調査では縄文時代と考えられる60点を超えるガラス玉、ヒスイ製勾玉、金属製品がまとめて出土し、口縁部突起に動物意匠がついた北筒式土器がみつかり、話題になった。

基本土層はⅠ層：表土、耕作土、Ⅱ層：黒色土、主に縄文時代の遺物包含層、Ⅲ層：黒褐色土、主に縄文時代の遺物包含層、Ⅳ層：黄褐色土、摩周火山起源の火山灰(Ma-g-k)、約7,000年前降下、Ⅴ層：黒色土、縄文時代早期以前の遺物包含層、Ⅵ層：黄褐色ローム層(盛土はこの層を主体とした土で形成される)である。

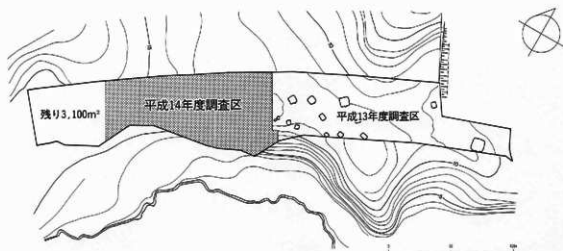
### 遺構と遺物 ( )内は平成13・14年度合計

今年度の調査で確認された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡13(26)軒、土坑1ヵ所、焼土5(9)ヵ所、集石1(2)ヵ所、時期は縄文時代の終わり頃と考えられる。竪穴住居跡は正方形でカマドと炉を有するタイプ①と、長方形で炉のみがみられるタイプ②がある。①では大型(長径7～8m)と、小型(長径4～5m)のものがあるが、いずれもカマドが東壁に作られる。②では周溝が床面壁際にめぐる例がみられた。竪穴内の遺物は若干の縄文式土器、鉄製品のほか、H-26以外で1～3ヵ所の集石が確認された。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡11軒、土坑20(22)基、盛土10ヵ所、焼土1ヵ所、時期は中期末～後期初頭と考えられる。

竪穴住居は平面形が長円形・卵形・不整形とバリエーションがあり、長円形の比較的掘り込みが浅い3軒が炭化材をともなう焼失住居であった。また平面形が不整形となる掘り込みの深い竪穴住居跡がある。土壌には形状的には住居と変わらない不整形のものがみられたほか、ベンガラ層?が墳底近くにみられる墓の可能性が高いものがあつた。盛土は黄褐色土(Ⅵ層)を主体とした土がⅢ層中にまとめてみられた場所で、遺物の集中、焼土、炭化材が伴うものがある。遺物は北筒Ⅱ・Ⅲ式土器、石鏃、石槍、スクレイパー、石鏝、砥石、フレイクなどが比較的まとめて出土している。盛土の1つでは獣骨が出土している。

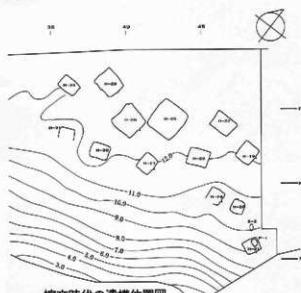
出土遺物は縄文時代・縄文時代中期末～後期のものがほとんどだが、縄文時代早期の石器や縄文時代の土器が若干出土している。なお次年度も継続予定(3,100m<sup>2</sup>)である。



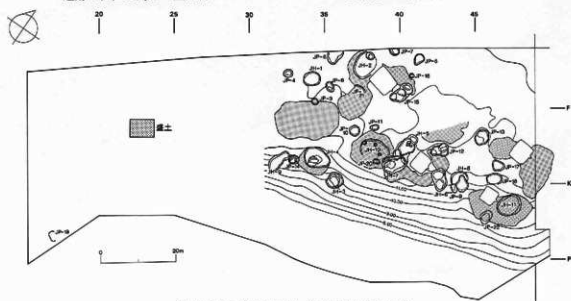
調査範囲図



遺跡の位置と周辺の竪穴群



縄文時代の遺構位置図  
等高線はII層上面



縄文時代の遺構位置図 等高線はIII層上面



調査風景 (手前H-26・奥H-25)



周溝のある擁文住居 (H-23)



集石の出土状況 (H-28)



カマド検出状況 (H-24)



焼失住居の調査 (JH-1)



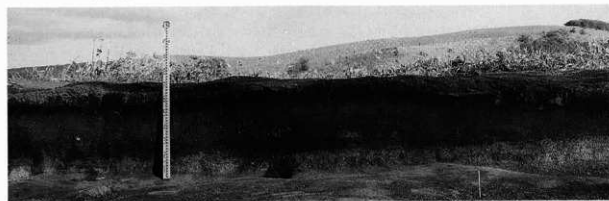
JH-1床面出土の土器



炭化材出土状況 (JH-2)



土坑の完掘 (JP-15)



盛土の土層断面 (JM-1)

白滝遺跡群

事業名：一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

発掘期間：平成14年6月3日～10月25日

調査員：長沼 孝、鈴木宏行、立田 理、直江康雄

調査遺跡一覧

遺跡名(道教委登録番号)	所在地	調査面積(m <sup>2</sup> )
旧白滝8遺跡(I-20-31)	紋別郡白滝村字旧白滝442	2,610
旧白滝9遺跡(I-20-32)	紋別郡白滝村字旧白滝438	3,380
下白滝遺跡(I-20-23)	紋別郡白滝村字下白滝99-1	2,250
合計		8,240

整理遺跡一覧

遺跡名(道教委登録番号)	所在地	遺物点数(点)
奥白滝11遺跡(I-20-65)	紋別郡白滝村字上白滝62-2	2,376
服部台2遺跡(I-20-13)	紋別郡白滝村字奥白滝18-3	798,030
奥白滝1遺跡(I-20-50)*	紋別郡白滝村字上白滝183-2、183-5	182,921
上白滝8遺跡(I-20-91)	紋別郡白滝村字上白滝181-4、182-2、182-3	1,349,748
上白滝6遺跡(I-20-89)**	紋別郡白滝村字上白滝123	1,600
白滝第30地点(I-20-6)	紋別郡白滝村字白滝382-4	4,267
白滝8遺跡(I-20-58)	紋別郡白滝村字白滝146-1、2	4,036
白滝18遺跡(I-20-92)	紋別郡白滝村字白滝145、139	47,853
白滝3遺跡(I-20-36)	紋別郡白滝村字白滝106外	41,281
旧白滝8遺跡(I-20-31)	紋別郡白滝村字旧白滝442	未集計
旧白滝9遺跡(I-20-32)	紋別郡白滝村字旧白滝438	未集計
下白滝遺跡(I-20-23)	紋別郡白滝村字下白滝99-1	156,514
合計		2,588,626

\* 平成12年度調査分

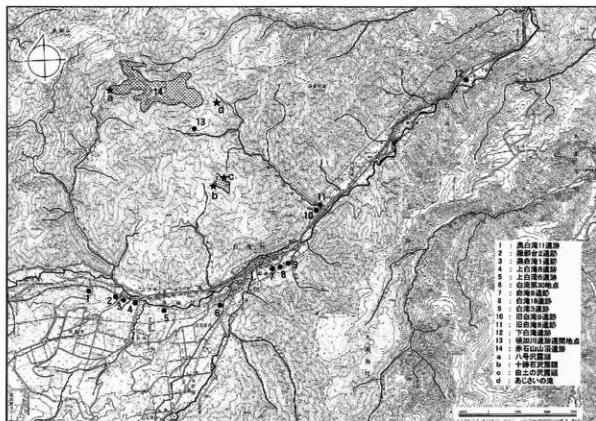
\*\* 平成13年度調査分

平成14年度調査の概要

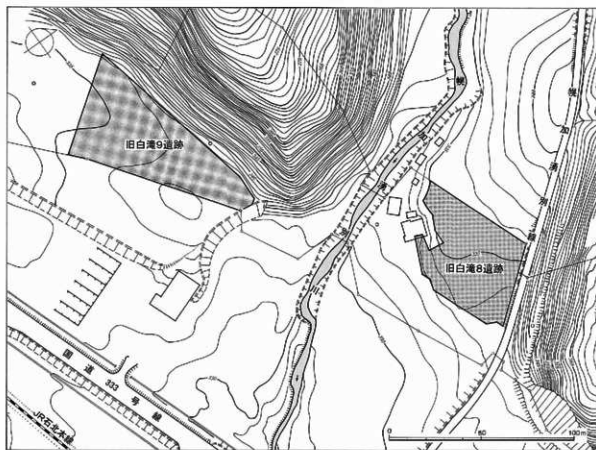
白滝村は、北海道の屋根といわれる大雪山系の東北山麓にあり、市街地の北西約6kmには国内有数の黒曜石産地として知られる赤石山がある。村内を東西に流れる湧別川とその支流の支湧別川の河岸段丘上には旧石器時代の遺跡が多数所在し、それらは白滝遺跡群と総称されている。特に、赤石山に通じる八号沢川と湧別川との合流点付近には、白滝第13地点をはじめ、服部台、白滝第32地点、白滝第33地点など、学史的に有名な遺跡が集中している。また、1997年には新たに約20万m<sup>2</sup>が国指定遺跡に追加され、すでに指定済みの「白滝遺跡」(白滝第13地点遺跡)と合わせて「白滝遺跡群」として名称変更された。

今年度の調査はその史跡白滝遺跡群より湧別川をさらに下り、支湧別川との合流点より下流の地域で行った。調査した3ヵ所の遺跡は全て河岸段丘上にあるが、調査地点は大きく2ヵ所に分かれている。一方は赤石山南東側の幌加湧別川と湧別川との合流点付近にある旧白滝8・9遺跡、他方はその合流点からさらに湧別川を6kmほど下り、丸瀬布町との境界近くに位置する下白滝遺跡である。なお、下白滝遺跡は昨年度からの継続調査である。

以下各遺跡の詳細な位置および地形、また出土遺物の概要を説明する。



赤石山（原石山）と遺跡の位置



旧白滝8・9遺跡 調査範囲図

#### 旧白滝 8 遺跡の調査

遺跡は、白滝市街から北東へ約3.4km、幌加湧別川と湧別川との合流点を約400mさかのぼった幌加湧別川左岸に位置する。調査区は標高約340m、地形は幌加湧別川に向かってゆるやかに傾斜する斜面が大部分であるが、幌加湧別川の浸食を受けた急斜面とそれに続く平坦面も一部みられる。調査区は全面にわたって後世の耕作や宅地の造成による攪乱を受けているため、包含層はほとんど残存していないが、前述した斜面とそれに続く平坦面では縄文時代の包含層が残っている部分があった。

土層は幌加湧別川および湧別川の河川堆積物、また調査区の北東方向に延びる沢の崖堆積物が複雑に堆積し、見極めは困難であったが、以下のように大まかに分層した。

I層＝耕作攪乱層 I<sub>a</sub>層＝黒褐色土（包含層） I<sub>b</sub>層＝暗褐色土（包含層） II<sub>a</sub>層＝黄褐色粘土 II<sub>b</sub>層＝黒褐色土 II<sub>c</sub>層＝黄褐色砂混粘土 III層＝砂層 IV層＝砂礫層 V層＝礫層

遺構は焼土3ヵ所、フレイク・チップ集中域が14ヵ所検出されている。ほとんどが幌加湧別川旧河道に沿ったI<sub>b</sub>層上面で検出されおり、同一層から出土している土器から、縄文時代のもと考えられる。

遺物は主にI層から出土しているが、III層中からも2ヵ所のフレイク・チップの集中域が確認されたほか、若干の遺物が出土している。また、風倒木や木根等に伴う自然の落ち込みから大量の遺物が出土している。土器は最も多いものが縄文時代後北C<sub>1</sub>式に相当するもの約40点、ほかにわずかではあるが早期とみられるものも出土している。石器は同時期とみられる石鏃、削器、両面加工ナイフおよびその製作途中とみられる両面調整石器が多く出土し、ほかに石核、剥片・砕片など、石器製作に関わる遺物も多量に出土している。

#### 旧白滝 9 遺跡の調査

遺跡は、旧白滝 8 遺跡の幌加湧別川を挟んだ対岸に位置する。調査区は幌加湧別川の右岸にあり、標高は約340m、地形は比較的平坦ではあるが湧別川に向かって緩やかに傾斜している。調査区は後世の耕作により著しく攪乱され、包含層は残存していない。遺物は耕作土中からのみ出土し、全て石器類で、定形的なものとしては若干の石鏃、尖頭器（石槍・ナイフを含む）、削器等がある。

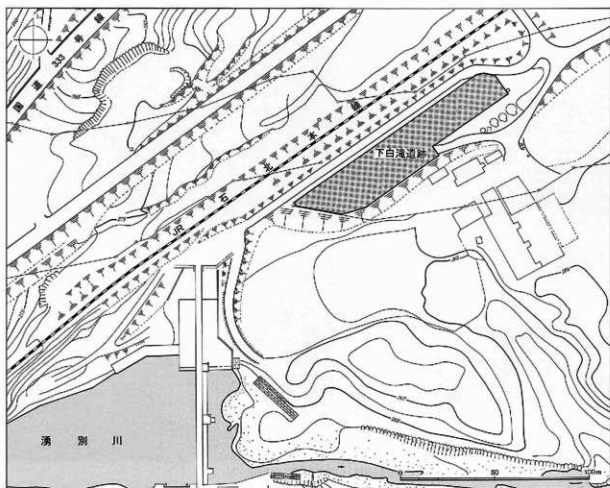
遺跡の時期は石器の風化度合いや器種などから縄文時代と考えられるが、土器が出土していないため、詳細は不明である。

#### 下白滝遺跡の調査

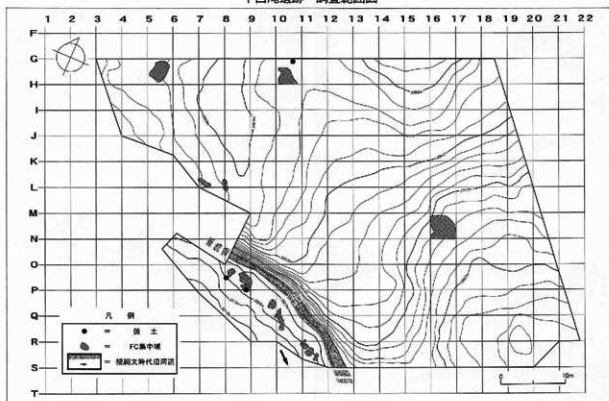
遺跡は、白滝市街の北東約9.5km、村名の由来となった「白滝」の downstream 500m、湧別川左岸の標高約270mの河岸段丘上に位置する。

調査区は全体に耕作が行われ、包含層は残存していない。遺物は耕作土中から多く出土したが、風倒木や木根などの自然攪乱中からも出土している。土器は47点出土し、縄文時代中期の押型・押引文土器に伴うとみられる無文の土器がやや多く、ほかに後・晩期とみられるものが少量ある。石器は石鏃、尖頭器（石槍・ナイフを含む）、つまみ付きナイフ、削器などの定形的なものほか、製作途中とみられる調整のある剥片や削片・砕片が多く出土している。





下白滝遺跡 調査範囲図



旧白滝8遺跡 遺構位置図



旧白滝 8 調査状況 (北西から)



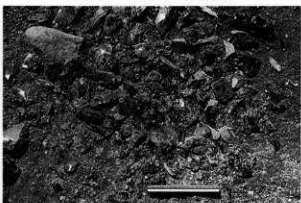
旧白滝 8 旧河道調査状況



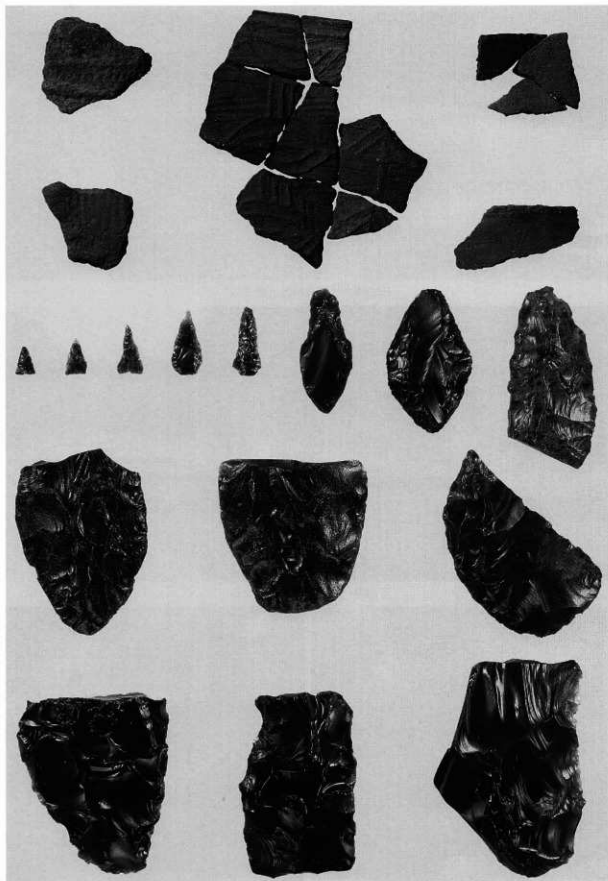
旧白滝 8 旧河道遺物出土状況



旧白滝 8 包含層調査状況



旧白滝 8 包含層遺物出土状況



旧白滝 8 出土遺物 (約1/2)



旧白滝 9 調査状況 (南から)



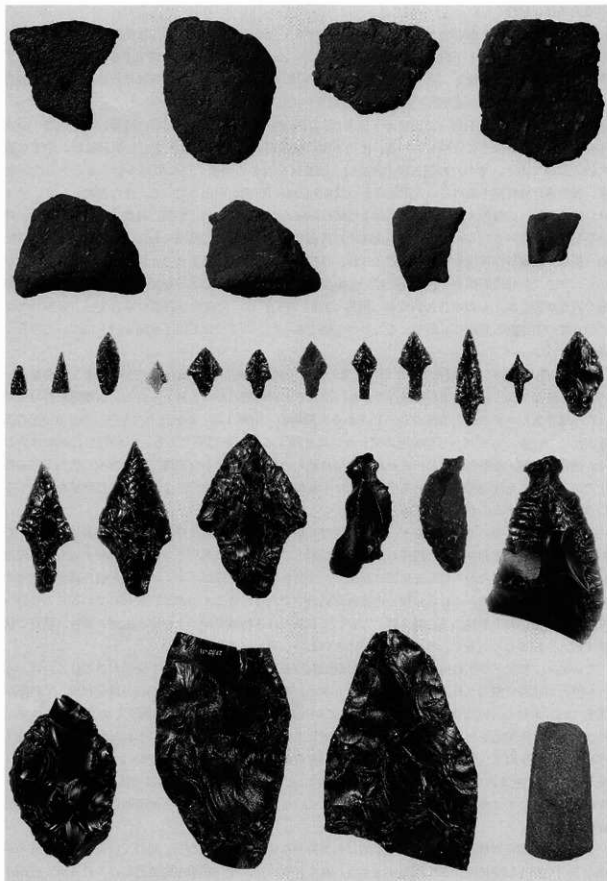
下白滝 調査状況 (北東から)



下白滝 木根遺物出土状況①



下白滝 木根遺物出土状況②



下白滝 出土遺物 (約1/2)

## 白滝遺跡群の整理

今年度は奥白滝11・服部台2・上白滝8・上白滝6・白滝第30地点遺跡の二次整理と、今年度調査した旧白滝8・旧白滝9・下白滝遺跡の一次整理を行った。二次整理に関して説明すると、図化・データ整理は奥白滝11・上白滝8（東地区）・上白滝6（平成13年度調査区）・白滝第30地点遺跡を、石器接合は上白滝6・上白滝8（西地区）・服部台2遺跡を中心に行った。

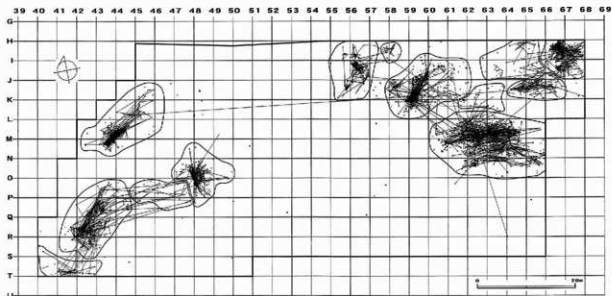
今年度主体的に作業を行った上白滝8遺跡は、国指定史跡「白滝遺跡群」（白滝第13地点遺跡）の南側の一段高い段丘面上に立地している。出土石器の総数が約135万点と膨大で、白滝遺跡群の中では最大級の遺跡である。そのため報告書の作成は、調査区を大きく東西二つに分けて行うこととした。現在、報告書作成作業を進めている東地区からは約70万点の石器が出土している。主な遺物として、サイコロ状の石核、広錐型ナイフ形石器、峠下型細石刃核、大型の石刃核、彫器、搔器、削器、尖頭器、舟底形石器などがみられる。石器分布が全体的に濃密で、接合状況も広範囲にわたって複雑にみられるため、複数の石器群が重複していると考えられ、各石器群を厳密に分離することは困難な状況である。しかし、サイコロ状の石核や「台形椽石器」・「小型不定形剥片石器」などと呼ばれている剥片の一部に微細な剥離が施されたものを含む石器群（仮称「白滝Ⅰ群」）は、特徴的な石器や接合関係、分布状況などから他の石器群と分離して整理することが可能であった。ここではその「白滝Ⅰ群」について詳しく説明を行う。

「白滝Ⅰ群」の中には、現在道内で最古と思われる千歳市祝梅三角山遺跡や清水町共栄3遺跡などと同様の石器類や剥片剥離技術の特徴がみられ、それらと同時期のものと考えられる。白滝遺跡群の中では昨年度報告した奥白滝1遺跡のSb-1~6からも同様の「白滝Ⅰ群」が出土している。約9,600点の石器が出土し、さらにそれらは13ヵ所のブロックに分離することが可能である。定形的な石器類は少なく、搔器・削器・錐形石器が若干みられ、大半は剥片の縁辺にわずかな剥離が施される二次加工ある剥片である。中でも片側縁が「く」の字状の剥片・縦長剥片の腹面側やうろこ状剥片の打面側を除去するように加工を施すものが特徴的にみられる。

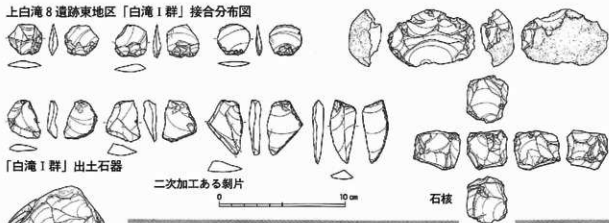
剥片剥離技術について説明すると、剥片を素材として求心状に寸詰まり・うろこ状の剥片を剥離するもの、素材剥片の腹面を打面に固定して打面が幅広い剥片や縦長剥片を連続的に剥離するもの、礫素材で交互剥離を行いながら打面を頻繁に転位し、寸詰まり・片側縁が「く」の字状・縦長剥片を剥離するものなどがみられる。これらは同一の接合資料の中でみられることがあり、共存していることが分かる。これは奥白滝1遺跡の「白滝Ⅰ群」においてもみられる特徴だが、上白滝8遺跡の場合、原石の状態で搬入されるものが多く、そのサイズが大きいうちの差がある。

その他に、板状・棒状の角礫を素材として縦長剥片を連続的に剥離している資料がみられる。ほとんどが原石の状態で搬入され、分割されるものも多い。石核調整は施されずに原石の稜を利用して剥離が開始され、素材の分割面に打面を固定して石核の両側縁を中心として剥離を行うものや素材の長軸に沿って打面と作業面を交互に入れ替えながら剥離していくのがみられる。得られた縦長剥片から加工されるものは少なく、若干の二次加工ある剥片がみられる程度である。接合資料の中で最大のものは、長さ66.5cm、重量約17.8kg（母岩70・接合177）で、大型の縦長剥片を剥離した後、石核を2分割し、先の剥片も含めて3個体で縦長剥片の剥離を行っている。現在のところ、白滝遺跡群の中で最長の接合資料である。

これらの角礫を素材とした資料は全道的に検出例がみられない。しかし、他の「白滝Ⅰ群」と分布が重なる点や剥片剥離技術に石核調整が全く行われていない点、交互剥離が特徴的にみられる点、打面が大きくバルブが発達する剥片の特徴などから「白滝Ⅰ群」との関連性が強いと考えられる。



上白滝8遺跡東地区「白滝1群」接合分布図



「白滝1群」出土石器

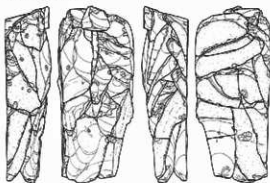
二次加工ある剥片

石核

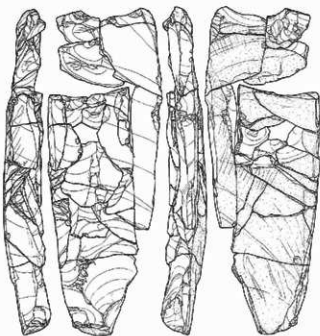
「白滝1群」接合資料



母岩4 接合4



母岩34 接合72



母岩26 接合64



湧川左岸遺跡 (B-15-22)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：北海道茅部郡森町字石倉町401ほか

調査面積：3,630m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年5月7日～8月30日

調査員：熊谷仁志、村田 大、影浦 覚、大泰司統

遺跡の概要

遺跡はJR森駅から北西方向に約9km離れた標高37～45mの湧川河岸段丘上に立地する。海岸から約700m内陸の山林内に位置しており、調査区南側には湧川が、北側には無名沢が流れている。調査区中央の沢地地形より森側をA地区、八雲側をB地区と呼称して、調査を進めた。便宜的に30ラインを両地区の境界としている。A地区の平坦面は標高42～44m、B地区の平坦面は標高38～40mである。平成13年度にA地区の湧川段丘縁850m<sup>2</sup>と、B地区の無名沢の段丘縁450m<sup>2</sup>を調査し、今年はこの両区間の3,630m<sup>2</sup>について調査をした。2ヵ年の最終調査面積は4,930m<sup>2</sup>である。

基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d (Ko-d)層、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：黒色土、Ⅴ層：黄褐色土、Ⅵ層からなる。Ⅲ層とⅣ層の間に白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm)、Ⅴ層上位に駒ヶ岳火山灰g (Ko-g)が部分的に検出されたが、分層はしなかった。調査区中心部にある沢地地形をはきんで台地の成因が違うため、Ⅶ層の内容は、A地区黄褐色砂礫層、B地区湧川火砕流堆積物層とそれぞれ異なる。遺物包含層はⅢ～Ⅶ層である。特にⅣ層において多く出土した。

遺構と遺物

今年度検出された遺構は、住居跡4軒、ピット35基、焼土6ヵ所、小ピット139ヵ所である。2ヵ年の合計では、住居跡19軒、ピット94基、焼土36ヵ所、小ピット306ヵ所である。

遺構はA・B地区とも昨年の調査区に隣接した部分に多く、調査区中央の沢地地形に近づくほど疎になる傾向が認められた。遺構の時期は縄文時代中期前葉から後期前葉にかけてと考えられるが、特に今年度検出した住居跡4軒 (H-17～20)は、石組炉の形状・出土遺物などから縄文時代後期前葉と考えられる。これらはいずれも東側の床面から、大形の扁平礫が2個並行させて立てた状態で検出され、規則性が窺える。ピットではP-60で頁岩の大型剥片81点がまとまった状態で出土し、接合作業の結果、これらは同一母岩と考えられる。

出土した遺物の総数は約99,000点で、その内訳は土器等約92,000点、石器等約7,000点である。土器がほぼ全体の9割を占める。時期は縄文時代早期から後期、統縄文時代のものである。中でも後期前葉の余市式・涌元式・鳥崎式・白坂3式等が約82,000点と多く見られた。また、前期の円筒土器下層式が5,300点出土しているが、うち4,900点はB地区で出土し分布の違いを示している。他には中期前葉のサイベ沢貫式の頃の土器が4,100点出土している。統縄文時代のものでは恵山式と後北式の土器が出土した。石器等では剥片石器でスクレイパー、礫石器ではたたき石が比較的多く見られる。また、定形的な礫石器では肩平打製石器の占める割合が高い。土製品には土製玉、再生土製円板があり、石製品にはヒスイ製の玉が1点出土している。2ヵ年にわたる調査の総出土点数は約196,000点である。



2002濁川左岸遺跡 出土遺物集計表

02. 10. 28現在

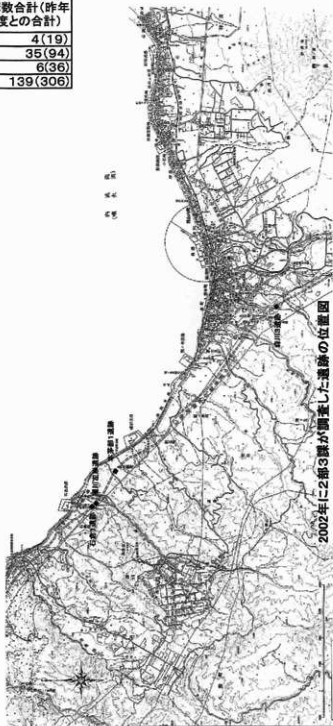
	A地区遺構	A地区包含層	B地区遺構	B地区包含層	合計
土器・土製品	2378	68746	1577	19355	92056
剥片・剥片石器	94	2458	118	2068	4738
礫石器・石製品	33	635	60	264	992
鏝	172	533	120	206	1031
合計	2677	72372	1875	21893	96817

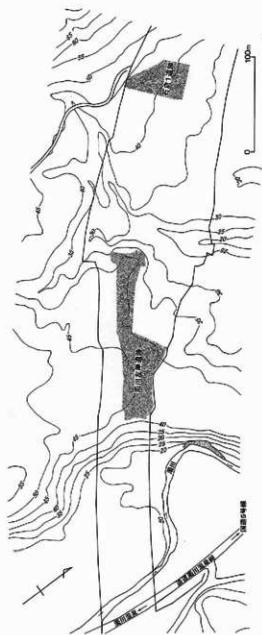
2002濁川左岸遺跡 検出遺構数 2002. 10. 28現在

	A地区(昨年度との合計)	B地区(昨年度との合計)	今年度検出遺構数合計(昨年度との合計)
竪穴住居跡	2(11)	2(8)	4(19)
土坑	16(64)	19(30)	35(94)
焼土	6(36)		6(36)
小ピット	139(306)		139(306)

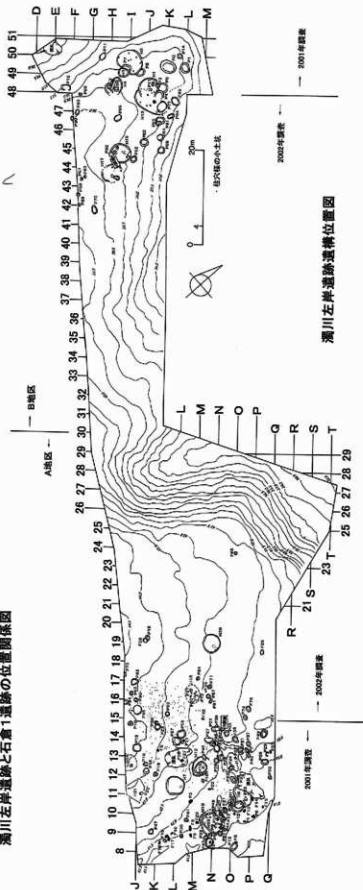


基本土層模式図





濁川左岸遺跡と石倉1遺跡の位置関係図



濁川左岸遺跡遺構位置図



P-60 遺物出土状況



H-18 調査風景



H-17 (手前)、19 調査風景



完掘

本茅部1遺跡 (B-15-23)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡森町本茅部274ほか

調査面積：2,200m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年5月7日～7月15日

調査員：谷島由貴、中山昭大、袖岡淳子

遺跡の概要

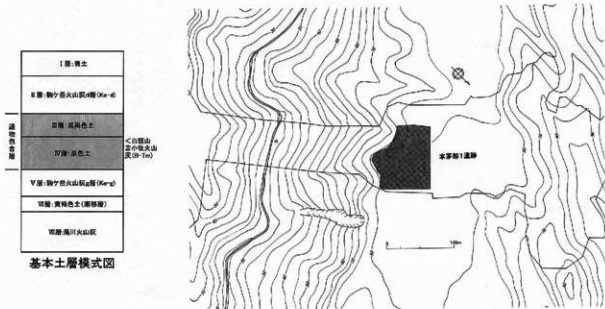
遺跡は森町市街地より約10km八雲町方向へ離れた本茅部地区にあり、内浦湾に面する標高90m前後の海岸段丘上に位置する。海岸線より1kmほど内陸に入り、台地を開析する沢跡より徒歩で急崖を登ると、駒ヶ岳が一望できる遺跡に辿り着ける。調査区は、台地の先端部が南西に張り出し、北側には緩やかな沢状地形が2条走る。遺構、遺物を多く検出したのは、調査区南～南西側にかけての沢状地形による影響を受けないところである。

基本土層はI層：表土、II層：駒ヶ岳火山灰d層 (Ko-d)、III層：黒褐色土、IV層：黒色土、上位に白頭山苫小牧火山灰 (B-Tm) が部分的に検出されたが分層していない、V層：駒ヶ岳火山灰g層 (Ko-g)、VI層：漸移層、VII層：褐色粘質土層、VIII層：(濁川火砕流堆積物層)。遺物包含層はIII、IV層で、IV層からの出土が多い。

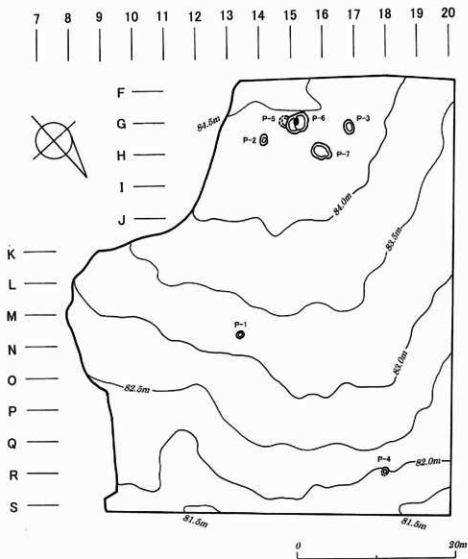
遺構と遺物

遺構は縄文時代中期に属する土壌が7基検出されている。土壌はP-1、4を除き調査区南側に集中する。P-2は縄文時代中期前葉に属する土器が1個体立った状態で出土した。P-7は墳底から直径30cm、深さ50cmの柱穴が2ヵ所確認された。上屋のような構築物を支えたものかと推測する。

遺物は、III層からは中世と推測できる刀子が出土しており、IV層からは縄文時代前期、中期、晩期の土器、石器等が約5,500点出土している。主体は縄文時代中期前葉円筒土器上層式のサイベ沢VI式～見晴町式期のものである。



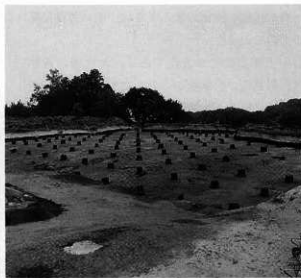
遺跡の位置と周辺の地形



遺構位置図



調査風景



完掘

## 倉知川右岸遺跡

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字粟ヶ丘7ほか

調査面積：9,350m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年5月7日～10月31日

調査員：種市幸生、菊池慈人、新家水奈、坂本尚史、福井淳一、柳瀬由佳

### 調査の概要

遺跡は、南西側の山地から続く、標高74～80m付近の緩斜面上に立地している。噴火湾の海岸線までは約1.5km、島崎川本流までは約0.9kmである。調査区は、北西側を島崎川の支流である倉知川に、南東側を無名の沢に区切られた台地状の地形となっており、川との高低差は約5mである。無名沢は調査区から50mほど溯ると湧水点に達する。

遺構・遺物は、無名沢側の斜面際に集中しており、そこから、縄文時代後期前葉に属する、配石遺構・フラスコ状ピットをはじめとする遺構群が検出された。

### 遺構と遺物

検出された遺構は、配石遺構1基、竪穴住居跡9軒、土坑（土壌を含む）90基、焼土11ヵ所、石組炉14ヵ所、柱穴状ピット226ヵ所である。その多くは無名沢側に集中しているが、倉知川側にもややまとまる傾向がある。

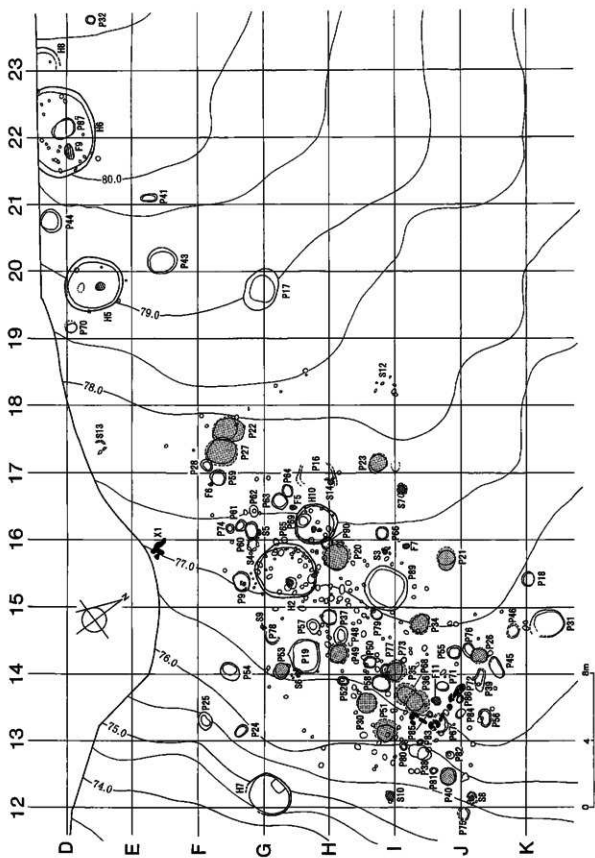
無名沢側の遺構の集中部分には、中期前半の竪穴住居跡などのまとまりと、後期前葉の配石遺構・土坑などのまとまりが認められる。中期前半の遺構のまとまりは、無名沢からやや離れた調査区山側に位置しており、調査区域外に続くものと予想される。後期前葉の遺構のまとまりは、無名沢へ続く斜面際に位置しており、配石遺構・フラスコ状ピットなどの土坑・石組炉・柱穴状ピット・竪穴住居跡が密集して分布する。またこの範囲では、土層の堆積状況から、土地の造成が行われた可能性が認められた。遺構間の新旧関係とともに、今後詳細な検討が必要である。

倉知川側の遺構のまとまりは、主に後期後葉のものである。

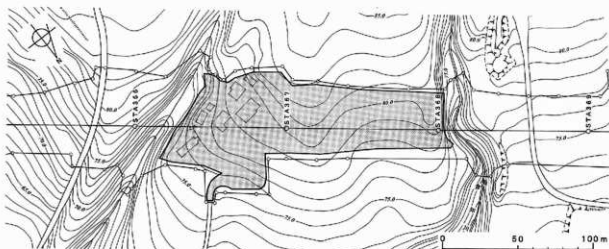
出土遺物は約8万点である。包含層の遺物は、無名沢の斜面際から斜面にかけて集中して出土している。土器は、中期前半の円筒上層b～d式・サイベ沢Ⅶ式、後期前葉の島崎式・大津式などが多く、そのほか早期前半の貝殻文系のもの、前期後半の円筒下層式、後期後葉の堂林式などが少数出土している。石器は、これらの土器に伴う石鏃・スクレイパー・半円状扁平打製石器・北海道式石冠などが出土している。土玉や土偶の足、「石冠様石器」などの土製品・石製品も少量出土している。



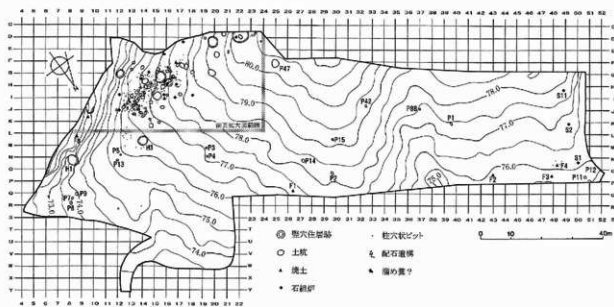
遺跡の位置



連絡位置図 (無名沢集落中地区)



遺跡周辺の地形と調査の範囲



遺構位置図



縄文時代中期の竪穴住居跡 (H-5)



縄文時代中期の土坑 (P-87)





縄文時代後期の配石遺構



縄文時代後期の竪穴住居跡 (H-2)



遺構集中地区完掘状況



縄文時代後期のフラスコ状ピット (P-20)

森川3遺跡 (B-15-26)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡森町字森川町317-18ほか

調査面積：2,200m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年7月16日～平成14年10月25日

調査員：谷島由貴、中山昭大、袖岡淳子

遺跡の概要

海岸線から2kmほど内陸に入った森川の河岸段丘上に立地する。標高95m前後のほぼ平坦な遺跡である。調査区北西側数10mのところ森川が流れており、段丘下には森川4遺跡があり、対岸には森川2遺跡、さらに小河川を挟んで上台1遺跡と続いている。

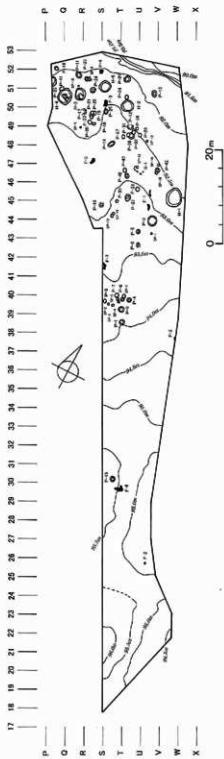
基本土層はI層：表土、II層：駒ヶ岳火山灰d層 (Ko-d)、III層：黒色土、IV層：白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm)、V層：黒色土、VI層：駒ヶ岳火山灰g層 (Ko-g)、VII層：褐灰色埴土、VIII層：明黄褐色埴土（最終面）。遺物包含層はIII層～V層である。

遺構と遺物

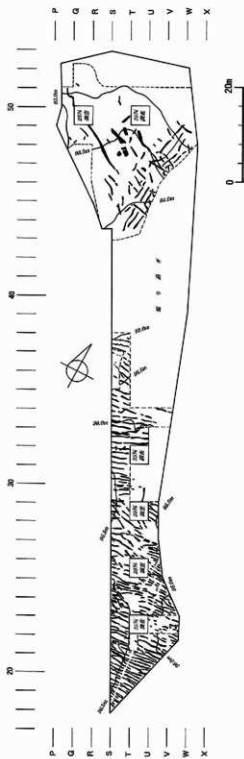
遺構は縄文時代前期～中期のものが主体で、竪穴住居跡5軒、土壇43基、焼土7ヵ所（1ヵ所は石組みが）、小ピット16ヵ所、及び近世の畑等があり、段丘縁辺部から多く検出された。土壇は縄文時代前期の墓壇、続縄文時代のものも1基検出されている。畑は調査区のほぼ全面に広がっており、IV層を掘り込んで幅1m程の畝を作り出していた。焼土の内、石組みが以外の6ヵ所は畑に伴うものである。

遺物はコンテナ160箱分が出土した。遺構と同様、段丘縁辺部に分布密度が高い。土器は縄文時代前期の円筒土器下層a式のものが多いが、その他、中期の円筒土器上層式、後期前葉のもの、続縄文時代の恵山式・後北式などもある。石器は石鏃、スクレイパー、礫石器等である。他に、畑との関連が想定される鉄製品が1点出土している。





遺構位置図



溝(軟間)位置図



畑調査風景



H-3 完掘

## 石倉1遺跡 (B-15-29)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉396・404

調査面積：1,753m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年9月2日～平成14年10月25日

調査員：熊谷仁志、村田 大、影浦 覚、大森司統

### 遺跡の概要

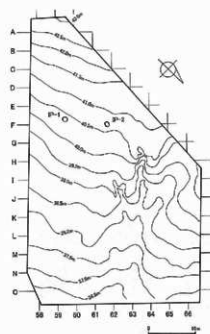
遺跡は濁川左岸遺跡の無名沢を挟んだ対岸の台地上に位置する。北東向きの緩斜面で標高は38～43mである。調査区の西から北東へ沢跡が見られた。土層観察からKo-d降下以前は恒常的に水が流れていたと思われる。木製品等は出土していない。また、試掘調査の結果から次年度以降の調査区である西側の台地と東側の無名沢へ向かって遺物が多くなる傾向が認められる。

基本土層はI層：黒褐色土、表土・耕作土、II層：駒ヶ岳火山灰d層 (Ko-d)、III層：黒褐色土、IV層：黒色土、III層とIV層の間で部分的に白頭山苔小牧火山灰 (B-Tm) が見られる、V層：黄褐色土、駒ヶ岳火山灰g層 (Ko-g) に由来する橙褐色砂質土を含む、VI層：黄褐色ローム層で、遺物包含層はIII層～V層である。

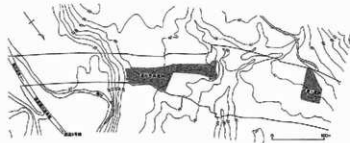
### 遺構と遺物

遺構は縄文時代後期のものと思われる土壇2基を検出した。IP-1は墳口部に台石を含む大形礫が検出された。覆土は埋め戻して、土壇墓の可能性もある。周辺から大形の礫が数点出土しているが土壇との関連は不明である。

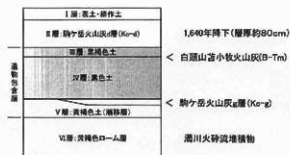
遺物は土器・石器などをあわせて1,480点が出土した。土器は縄文時代中期から後期初頭のものが主体である。石器は剥片石器では、石鏃、スクレイパー、石核が多く、礫石器ではたたき石が多いのが特徴である。また、統縄文時代の後北式が1個体まともに出て出土している。



遺構位置図



遺跡の位置



基本土層模式図



調査状況（南から）



IP-1 確認（北から）

野田生1遺跡 (B-16-47)

調査要項

- 事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査  
委託者：日本道路公団北海道支社  
所在地：山越郡八雲町野田生317-6ほか  
調査面積：11,160m<sup>2</sup>（平成12、13年度調査面積の合計、内4,820m<sup>2</sup>が遺構確認調査範囲）  
整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日  
調査員：穂市幸生、菊池慧人、藤井 浩、坂本尚史、福井淳一

発掘調査の成果

遺跡は八雲町「野田生」地区に位置し、噴火湾沿岸の遺跡群を構成する。平成12年と13年度に行われた発掘調査により、竪穴住居跡34軒、土壇、配石遺構139基、焼土32カ所、遺物集中出土地点48カ所が検出され、縄文時代中期から後期を中心とする集落遺跡が明らかになった。出土遺物は土器が約12万点、石器・礫が8万点で、縄文時代後期後半の時期を中心に後期前葉トリサキ式、中期サイベ沢Ⅷ式、早期貝殻文土器、続縄文恵山式の時期など広範囲にわたっている。

良好な保存状況が大きな特徴であり、竪穴住居跡からは完形状態の土器が多数出土した。特に完形の赤彩注口土器や朱塗り櫛、ペンガラ、アスファルトなどが住居床面上から出土した点は遺構、遺跡の性格を考えるうえで重要である。

本年度はこれらの成果についての報告書作成に向けた整理作業を行った。

整理作業の内容

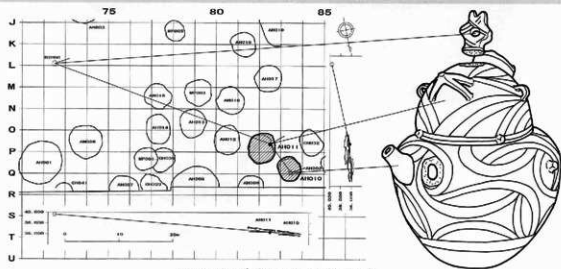
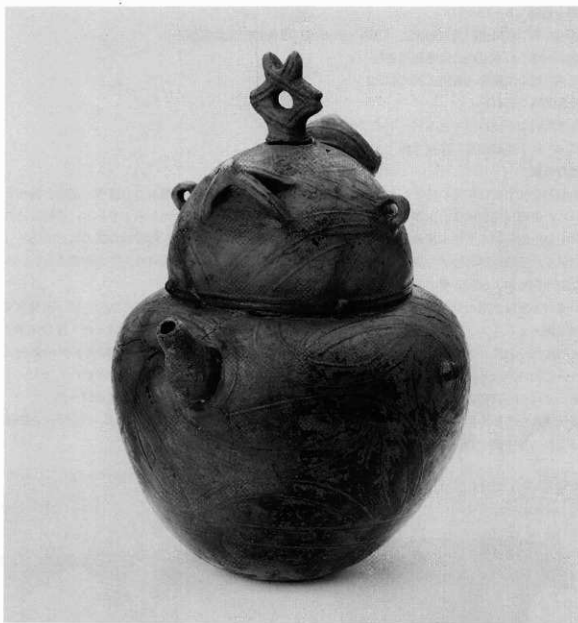
整理作業は土器の接合、復原、遺物の実測、写真撮影、図版作成、遺物、遺構データの整理などが主な内容であり、遺跡地形図の作成、デジタル処理や赤彩土器と朱塗り櫛の保存処理、自然科学的分析などは専門業者に委託して行った。

土器接合及び復原作業については、竪穴住居跡（AH011）出土の赤彩注口土器が遺構間接合により完形となった事実（図参照）を踏まえ、復原個体における接合破片の出土位置関係とその接合展開を重視しながら作業を進めた。その結果、200以上の個体を復原するとともに、後期竪穴住居間の接合関係が数多く明らかになり、隣接する住居の時期差の問題や遺物の人為的な移動の可能性を知るうえで重要な資料になると考えられる。

石器・礫の整理については出土状況を重視した分類選別を行い、竪穴住居の炉に伴う立石や配石に用いられた礫などについても、加工の有無以上に遺構との関連の深さなどを考慮したうえで、整理作業を行った。

赤彩土器と朱塗り櫛については実測及び写真撮影後に鶴岡文化財研究所に委託して保存処理作業を行った。赤彩土器については溶剤系アクリル樹脂を4段階に分けて塗布した後、本体と頭部突起、注口部分の接合を行った。朱塗り櫛については漆膜から土を除去した後、アクリル樹脂を含浸し固定した。

遺物、遺構データの整理はトータルステーションシステムを用いてパソコン上で行った。遺物については属性や接合関係を入力し、データベースを構築した。遺構に関しても3次元データとして管理し、航空写真から作成した遺跡地形図のデジタル処理化により、調査区内の地形情報と遺物、遺構データとの合成、統合的な把握が可能になった。しかし、確認作業の不徹底により生じた遺物データの混乱が整理作業の進行状況に与えた影響は大きく、今後の活用を図るうえでの反省点としたい。



AH011出土赤彩注口土器と接合関係

落部1遺跡 (B-16-77)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡八雲町入沢374ほか

調査面積：5,471m<sup>2</sup>

整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日

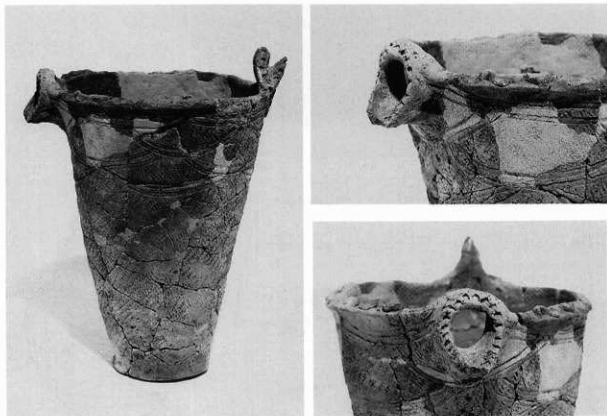
調査員：遠藤香澄、藤原秀樹

整理の概要

発掘調査は平成13年度に終了している。縄文時代中期から統縄文後半期までの遺構・遺物が検出されている。遺構は住居跡2、土壇7、Tピット7、集石4、焼土14、炭化物集中1である。遺物はその8割以上が中期前半のサイベ沢Ⅶ式期のもので、検出された2軒の住居跡もほぼ同時期のものである。平成13年度は遺構図等の原図の見直しと素図作成、石器の再分類、遺物台帳の修正等の作業を行い、本格的な整理作業および報告書の刊行は平成14年度行うこととした。

平成14年度は土器の分類見直しおよび接合・復元作業から開始し、加えて拓影図の作成、断面実測、土器実測・トレース、石器の実測・トレース、遺構図のトレース、集計作業等を行った。接合作業では17ヵ所検出された「土器集中」の資料を中心に、その周辺部の包含層のものとの接合関係の把握に努め、分布図の作成も併せて行った。この結果、サイベ沢Ⅶ式を主体に47個体が復元された。また、土器実測と並行し写真撮影を行い、順次挿図・写真図版の作成、一覧表作成、編集作業を行った。

復元された土器の中にサイベ沢Ⅶ式の口縁部に注口部のついた深鉢が1個体ある（写真）。北海道内ではこれまで中期の類例は知られていない。



縄文時代中期前半サイベ沢Ⅶ式期の注口部のある土器



本内川右岸遺跡 (B-15-7)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉町610-7 ほか

調査面積：2,746m<sup>2</sup>（平成13年度）

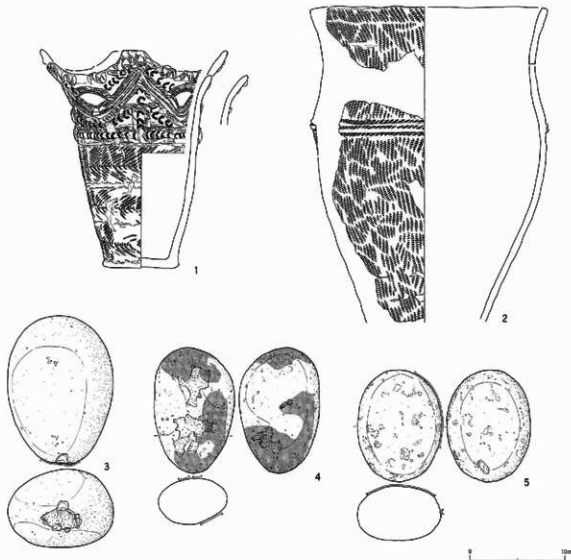
整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日

調査員：中田裕香

整理の概要

発掘調査は平成13年度に終了している。遺構は土壇3基が検出されたが、それらのうち時期の推定できるものは、1基が縄文時代中期前葉、1基が中期後葉である。遺物は縄文前期から晩期、擦文文化期のもものが出土しており、主体となるのは中期前葉と後葉のものである。

報告書の刊行は平成14年度とし、13年度には土器の接合・復原、遺物台帳の訂正、写真台帳の整理を行った。14年度には遺構図等の製図、遺物の実測・拓影の作成、集計作業、遺物分布図・一覧表の作成、遺物の写真撮影、挿図・写真図版の作成、編集作業を行った。



出土遺物（1 P-3、2～5 包含層出土）

## キウス4 遺跡 (A-03-92)

事業名：北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：千歳市中央208-12ほか

調査面積：4,240㎡（R地区）

整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日（継続・最終年度）

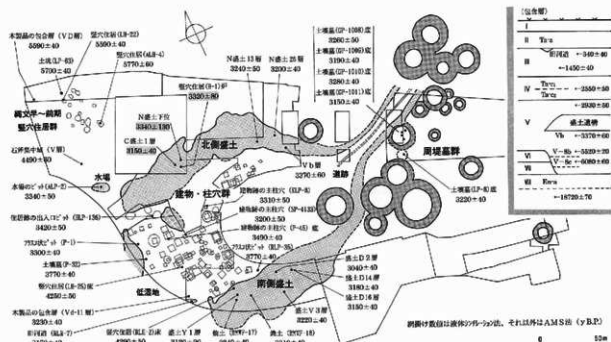
調査員：佐川俊一、阿部明義、山中文雄

### 遺跡の概要

遺跡は千歳市街地から北東約8km、馬追丘陵の西側緩斜面、標高4～19mに位置している。縄文時代後期後葉を主体とし、北東約300mにはほぼ同時期の国指定史跡「キウス周堤墓群」がある。遺跡の構造は、周堤墓群のある丘陵側、土壇・柱穴群のある緩斜面端部、水場遺構のある低地に大きく分けられ、さらに土壇・柱穴群をとり囲むように盛土遺構が形成されている。また、低地側には縄文時代早～前期の竪穴住居群がある。総遺物点数は600万点を超過しており、土器約500万点、石器約100万点、木製品・その他約1,000点に達している。大部分は縄文時代後期後半に属するものである。

### 整理の概要

キウス4遺跡では平成5・7～10年度に発掘調査を行い、北埋調報119集「キウス4遺跡」を初めてして平成13年度までに8冊の報告書を刊行した。今年度は昨年度に引き続き、約430万点の遺物が出土したR地区の整理作業を行った。昨年までに遺構図作成・遺物整理・遺物図版作成・遺物写真撮影などを終了し（一部除く）、今年度は遺物接合図・分布図等の作成・総集計・一覧表作成・原稿執筆・遺物収納作業などを行い、報告書の刊行作業を行った（北埋調報180集「キウス4遺跡(9)」）。またキウス4遺跡全体のまとめを若干行い（図・表例）、その分を含めた報告書の刊行を予定している（平成14年度末・「キウス4遺跡(10)」）。



キウス4 遺跡 主な遺構群と <sup>14</sup>C年代測定値（補正年代）

※自然科学的手法による分析・鑑定について

キウス4遺跡の各報告書刊行にあたって、下記にあげるように多種多数に亘って分析・鑑定を依頼・委託してきた。その結果、遺跡の古環境を推定復元したり、当時の人々の動・植物の利用のあり方や遺物製作技術の一端を明らかにしたり、遺物の原材入手先（交易のあり方）の推定をするなど、考古学的な考察からは限界のある事象についての貴重な資料及び見解を得ることができた。これらの成果は各報告書の個々の記載事項やまとめに反映されているが、さらに遺跡全体としてのまとめを行っているところである（『キウス4遺跡(10)』）。

一例として放射性炭素<sup>14</sup>C年代測定の結果の一部を図示した（左下図）。これらの数値は遺跡の形成過程を考察したり遺物の編年を考察したりする際の重要な資料となる。ただし、測定方法（液体シンチレーション・AMS）や測定試料の内容（炭化材・堅果・ススほか）・量などに十分注意をしながら利用していくことになる。

表 キウス4遺跡分析一覧

分析内容	キウス4遺跡報告書番号									計
	『(1)』	『(2)』	『(3)』	『(4)』	『(5)』	『(6)』	『(7)』	『(8)』	『(9)』	
<sup>14</sup> C年代測定〔液体シンチレーション〕 〔京都産業大学〕		15	5							20
<sup>14</sup> C年代測定〔AMS〕 〔地球惑星科学研究所〕			21	10	15	1	19	4	15	85
チフラー分析 〔当センター 花岡正光〕			11							11
地割れ観察 〔北海道立地質研究所 廣瀬直ほか〕					1地点					1地点
花粉分析 〔北海道開拓記念館 山田徳郎〕		1地点 27試料								1地点 27試料
建築分析 〔石狩市教育委員会 志賀健明〕		1地点 28試料		1地点 28試料						2地点 54試料
花粉・建築・植物建群体分析 〔關バリオ・サーグエイ〕			3地点 68試料						3地点 32試料	6地点 100試料
人骨の人類学的観察 〔国立科学博物館 松村博文ほか〕					11					11
動物遺存体の同定 〔千歳サケのふるさと館 高橋理〕		325	390	76		19	339	428	855	2432
植物種子の同定 〔札幌国際大学 吉岡昌一ほか〕		77	38	47		19	15	150	324	670
炭化材樹種同定 〔關バリオ・サーグエイ〕		21							6	27
炭化材樹種同定 〔北海道大学 佐野雄三ほか〕					6					6
木製遺物の樹種同定 〔当センター 菊池育子〕		20	166	223					246	655
キノコ同定 〔北海道大学名誉教授 五十嵐恒夫〕									3	3
脂肪酸分析 〔關ズコーシヤ〕			17		37		6		3	63
アスファルト分析 〔北海道大学 小笠原正明〕		4						6	7	17
赤色顔料・漆製品分析 〔北海道開拓記念館 小林幸雄〕		6	5						15	26
黒曜石原産地分析 〔京都大学 藤科哲男〕		50	17	50	11		30		21	179
黒曜石水和層測定 〔京都大学 藤科哲男〕				50	11					61
ヒスイ製品・玉類原産地分析 〔京都大学 藤科哲男〕		3			8			30ウチヒスイ例		41

※備考。『(2)』『(3)』……は『キウス4遺跡(2)』『キウス4遺跡(3)』……をさす。  
なお『(1)』とは、北編図報119号『キウス4遺跡』をさす。

## ユカンボシC15遺跡 (A-03-263)

事業名：北海道横断自動車道(千歳～夕張)埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団

所在地：千歳市長都1190-11ほか

調査面積：14,880m<sup>2</sup>(平成8年度：3,025m<sup>2</sup>・平成9年度：8,855m<sup>2</sup>・平成10年度：3,000m<sup>2</sup>)

整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日(継続)

調査員：三浦正人、鈴木 信、吉田裕史洋

### 遺跡の概要

遺跡はJR千歳駅の北方約400mに位置する。往時、千歳川・長都川・ユカンボシ川等の水を集めた長都沼が広がる停滞水域・低湿地の西端部で、ユカンボシ川に隣接する標高5～9mの地帯に営まれた、旧石器～近世アイヌ文化期の複合遺跡である。主体となる擦文～アイヌ文化期では、IB4～IB1・OB層から、1万点以上もの木製品が出土している。IB3層中には10世紀前葉の降下である苫小牧-白頭火山灰(B-Tm)が断続的に分布する。木製品には、舟とその関係品・生活用品・狩猟具・祭祀具・建築材のほか、漆椀・曲物・竹製品などの本州産品も含まれている。

### 整理概要

調査は平成8・9・10年度に行われ、順次整理作業が継続されて、昨年度まで5冊の報告書を刊行している。整理最終年度となる今年度の報告は、修正・追加・調査成果のまとめが主な内容となる。

最終的な取りまとめとして、木製品を主とした遺物の分類補正・台帳訂正・実測図作成整理・樹種同定・保存処理・接合復元・写真撮影・フィルム等整理を進めている。分類補正や台帳訂正は、木製品台帳をパソコンに入力して整理し、新たなデータの追加やカード書き替え、写真整理等と連動を図る作業として継続している。実測図と写真は、修正・追加と木製品種類報告のための作業。樹種同定は、木製品や層位と樹種選定・交易の関わりを捉えるために、再確認や不確定種の調査を主体にして、(独)森林総合研究所 平川泰彦氏の指導を受け作業している。保存処理はマンニトール+PEG含浸による真空凍結乾燥法とPEG含浸法で対処している。短期間で処理が進む小型品は外部との委託契約でも処理している。立体的製品や脆弱なものは、接合復元して強化し収蔵・展示に備えている。

### 前年度までの報告書の主な内容

[平成9年度 千歳市ユカンボシC15遺跡(1)北埋調報128集]

東側①③区の台地・低湿地部の遺構と遺物

擦文文化期の周溝のある墓や土坑墓・擦文～アイヌ文化期の木製品など

[平成10年度 千歳市ユカンボシC15遺跡(2)北埋調報133集]

西側②④区の縄文時代の遺構と遺物・旧石器時代の石器と木本遺存体

[平成11年度 千歳市ユカンボシC15遺跡(3)北埋調報146集]

西側②④区台地部の擦文～アイヌ文化期の遺構と遺物

同低湿地部の擦文文化期前期以前の遺構遺物(木製品など)

住居跡・建物跡・土坑墓・焼土等・擦文土器・石器・金属製品・擦文文化期前期の木製品

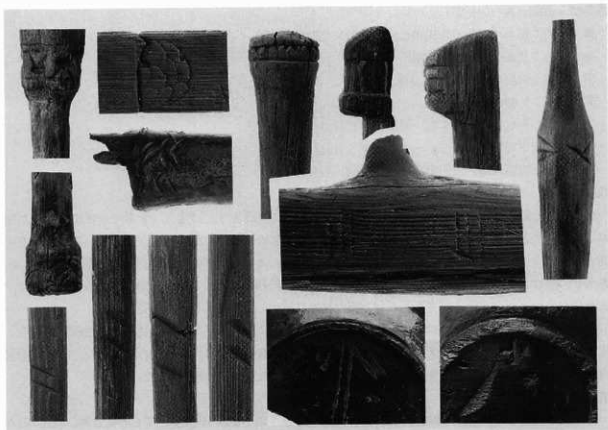
[平成12年度 千歳市ユカンボシC15遺跡(4)北埋調報159集]

西側②④区の低湿地部I B3層より上位の遺構と木製品以外の遺物全て

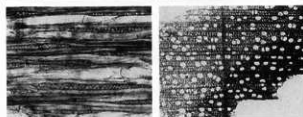
同低湿地部のI B3層(擦文文化期中後期)の木製品

[平成13年度 千歳市ユカンボシC15遺跡(5)北埋調報176集]

西側②④区の低湿地部I B2層より上位(アイヌ文化期)の木製品



木製品に彫られた刻文のいろいろ



樹種同定作業と顕微鏡写真



漆椀実測作業

にしきまつ  
西島松5遺跡 (A-04-38)

事業名：柏木川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道札幌土木現業所

所在地：恵庭市西島松539、543、544-2、3

調査面積：2,690m<sup>2</sup>

発掘期間：平成14年5月7日～平成14年10月31日

整理期間：平成14年4月1日～平成15年3月31日

調査員：佐藤和雄、土肥研晶、佐藤 剛、石井淳平

#### 遺跡の概要

遺跡は、恵庭市の西方、JR恵み野駅から北西約800mに位置する。遺跡は、南東を柏木川、北西を柏木川の支流であるキトウシュメンナイ川に挟まれた標高約25mの沖積低地上に立地する。今年度は遺跡調査の3か年目にあたり、平成12年度に検出された周溝のある墓の隣接地を調査した。平成12年度の調査区との境は、畑跡と居住域で引かれたものだが、擦文時代の墓域もこの線と重なるように途切れた。また、キトウシュメンナイ川寄りからは、新たに擦文時代の住居跡が検出された。

基本土層は、I層：表土・耕作土、II層：黒色土、III層：漸移層、IV層：黄褐色土（支笏軽石流の2次堆積）となっている。調査区内には部分的に層前a降下軽石層がII層上に残存していた。また遺物包含層であるII層は縄文後期～晩期初頭の盛土遺構を境にIIA層、IIB層に分けた。

#### 遺構と遺物

今年度の調査では、竪穴住居跡6軒、土坑58基（このうち1基は土墳墓）、Tピット3基、焼土171カ所、柱穴775基が検出された。この他、台地上に多量の遺物を含む、縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての人為的な層が広く分布するのを確認、これを盛土遺構とした。

遺物は、土器406,792点、石器90,386点、土石製品1,070点、骨角器3点、鉄製品3点が出土した。今後、土壌水洗等から得られた遺物の整理が進めば、遺物点数はやや増えると考えられる。出土した土器のうち93%が盛土遺構と同時期の遺物で、残りの6%が縄文時代中期、次いで0.4%が縄文時代、縄文時代後期中葉の遺物である。

#### 整理の概要

平成13年度調査の報告書作成作業を行った。

平成13年度の調査では、竪穴住居跡9軒、土坑131基、Tピット2基、焼土98カ所、柱穴1,498基、盛土遺構3カ所（MA、MB、MC）を検出し、遺物は土器563,537点、石器108,503点、土石製品1,100点、骨角器13点が出土した。これらのうち、盛土遺構と低位段丘及び斜面で検出された遺構（土坑4基、焼土8カ所）を除く、台地上の遺構と遺物の整理を行った。

土器・石器は接合・復元と実測図・拓影図の作成、図版作成、写真撮影を行った。フローテーション資料から抽出した動物遺存体と炭化種子については選別・同定作業を行った。

平成12年度の調査で土墳墓から出土した金属製品は、保存処理を継続して進めており、観察カード作成、X線写真撮影、クリーニング、実測図作成、脱塩、樹脂含浸を行った。また、残存状態の良い刀剣類20点は、駒元興寺文化財研究所保存科学センターに委託している。

報告書は次年度に刊行する予定である。



遺構位置図



住居跡調査状況(南から)



住居跡遺物出土状況



カマド部遺物出土状況

### 3 現地研修会の記録

#### 現地研修会の概要

9月5日(木)、6日(金)に千歳市オルイカ1遺跡、オルイカ2遺跡を主会場にして現地研修会を行った。今回は調査中の遺跡での研修にあわせて「千歳市周辺における遺跡調査の歴史」のテーマで講師二人を依頼した。講師のひとり佐藤一夫氏には「苫東埋文調査の顛末」の題での講演とともに、詳細な記録集を作成していただいた。さらに野村崇氏には「馬追丘陵における1960年前後の遺跡調査」についての講演、並びに現地案内をお願いした。

佐藤一夫氏は、さきに理事、現在監事として、野村崇氏は前年まで評議員として、当埋蔵文化財センターの運営に、ご尽力いただいている。

ここに講師二人の講演会資料と、遺跡現地案内で使用した遺跡分布図を再録する。

なお、遺跡巡検、考古資料探索では以下のところを訪ねた。

関係の機関には記してお礼申し上げます。

長沼町：タンネットウ遺跡、幌内神社、長沼町役場(12区B遺跡出土の異形環状土器)

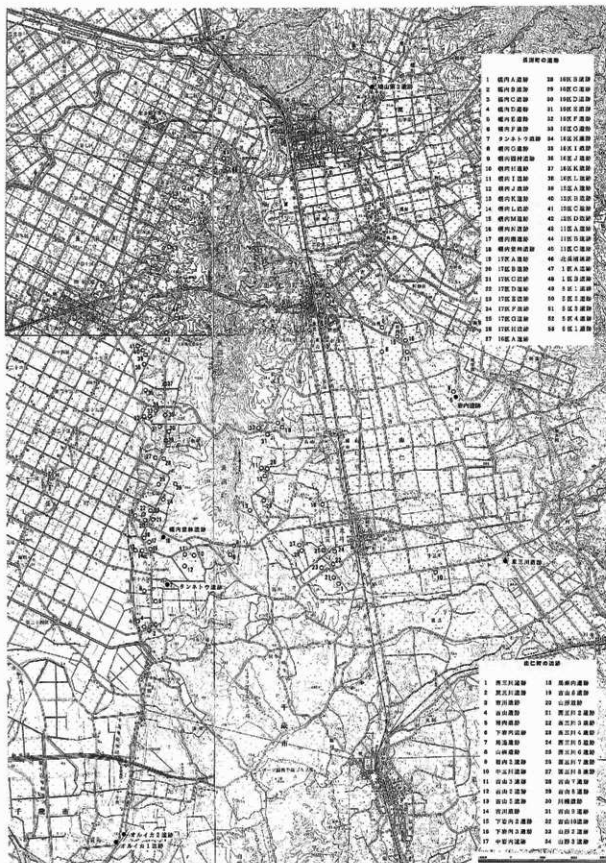
由仁町：東三川遺跡、岩内遺跡、ゆめっく館(岩内遺跡ほか町内の出土遺物)

恵庭市：カリンバ3遺跡展示室



異形環状土器を説明する野村崇氏





馬追丘陵の遺跡分布（長沼町、由仁町）



図1 昭和48～50年度分布調査地区および遺跡位置

表1 昭和48～50年度 掘開状況

年度	地区	(ha) 予定面積	(ha) 実施面積	(本) 掘開溝数	(㎡) 掘開面積	(㎡) 掘開土量
昭和48年度	A 柏原	690	287.7	402	4,824	7,236
	B 静川西	25	23.1	20	240	360
	C 萬森北	70	85	121	1,452	2,178
	D 萬森南	302	397.2	897	10,764	16,146
	E 浜厚真	137	175	200	2,400	3,600
	F 弁天		237.1	1,406	16,872	25,308
	計	1,224	1,205.1	3,046	36,552	54,828
昭和49年度	A 弁天浜厚真	410	410	1,015	8,120	12,180
	B 静川台地	75	75	207	1,656	2,484
	C 柏原台地	400	400	1,290	10,320	15,480
	D 東柏原湿地	164	164	335	2,680	4,020
	E 西柏原湿地	123	123	77	616	924
	F 静川湿地	142	142	211	1,688	2,532
	計	1,314	1,314	3,135	25,080	37,620
昭和50年度	A 弁天	410	410	587	4,696	7,044
	B 弁天湿地	145	145	207	1,656	2,484
	C 柏原湿地	16	0	0	0	0
	D 柏原台地	421	421	867	6,936	10,404
	E 遠浅	70	37	156	1,248	1,872
	F 静川・共和	126	95.5	200(六)	800	1,200
	計	1,188	1,108.5	1,817	15,336	23,004
3カ年 合計		(ha) 3,726	(ha) 3,627.6	200(六)本 7,998	(㎡) 76,968	(㎡) 115,452



図2 苫小牧市東部大規模工業基地開発計画

表2 苫東遺跡群発見遺跡数の変遷

期 間	市・町				遺 跡
	苫小牧市	厚真町	早来町	合 計	
分布調査以前 1973以前	5	1	0	6	
分布調査中 1973～1975	19	10	2	31	
本調査中 1975～1984	61	2	13	76	
本調査後 1984～2001	5	1	1	7	
現 在 2002	90	14	16	120	

表3 苫東遺跡群種別区分一覧

種 別	市・町				重複有り
	苫小牧市	厚真町	早来町	合 計	
遺跡包蔵他	55	6	15	76	
墳 墓	7	4	1	12	
狩猟場	20	4	1	25	
集落跡	17	3	0	20	
貝 塚	5	0	0	5	
埋没地点	2	1	0	2	
環 壕	1	0	0	1	

表4 苫東遺跡群時代区分一覧

時 代	市・町				重複有り
	苫小牧市	厚真町	早来町	合 計	
旧石器	2	0	1	3	
縄 文	77	15	13	105	
続縄文	18	7	2	27	
擦 文	7	4	1	12	
アイヌ	6	0	0	6	
近・現代	2	0	0	2	
不 明	8	0	2	10	
計	120	26	18	164	

表5 調査班体制の変遷

職 名	年 度											(人)
	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	合計	
班 長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10
調査員	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	30
補助員	10	14	14	24	16	31	38	18	16	5	186	
事務員	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	12	
合 計	16	19	20	30	21	36	43	23	21	10	238	



図3 古東道跡群の遺跡位置

表6 若東道跡群一覽(1)

№	遺跡名	種別	所在地	発見年	調査年	面積(m <sup>2</sup> )	時期
1	柏原1	遺物包含地	若小牧市	S48		3,330	縄文
2	柏原2	"	"	"		6,380	縄文
3	柏原3	"	"	"		5,530	縄文
4	柏原4	墳墓・狩猟場	"	"	S63	28,000	縄文・統縄文
5	柏原5	集落跡・墳墓	"	"	H3・4・5	48,000	縄文・統縄文・摩文
6	柏原6	遺物包含地	"	"		3,560	縄文?
7	柏原7	"	"	"		1,040	縄文?
8	柏原8	"	"	S49		15,590	縄文・統縄文
9	柏原9	"	"	"		950	縄文
10	柏原10	"	"	"		3,030	縄文
11	中 沢	"	"	—		3,000	縄文
12	柏原12	"	"	S49		5,920	縄文
13	柏原13	"	"	"		8,240	縄文
14	柏原14	貝 塚	"	"		11,937	縄文
15	柏原15	遺物包含地	"	S54		7,715	アイヌ?
16	柏原16	墳墓・狩猟場	"	S55	S55	3,778	縄文・統縄文
17	柏原17	集落跡	"	"	S57	5,007	縄文
18	柏原18	集落跡・墳墓	"	"	S55	4,904	縄文・統縄文・摩文
19	柏原19	狩猟場	"	"	S55	2,125	縄文
20	柏原20	遺物包含地	"	S56		2,000	縄文?
21	柏原21	"	"	"		2,800	縄文?
22	柏原22	"	"	S58		7,733	縄文
23	柏原23	"	"	"		4,200	縄文
24	柏原26	"	"	S63		15,250	縄文
25	柏原27	狩猟場	"	H2	H3・6	1,800	縄文
26	沼ノ端	遺物包含地	"	S41			縄文
27	旧安平川丸木舟	埋没地点	"	S56	S56		アイヌ
28	柏原丸木舟	埋没地点	"	S44	S44		アイヌ
29	弁天貝塚	貝 塚	"	S60	S61・62・63	2,000	アイヌ
30	静川1	遺物包含地	"	S48	S51	963	縄文
31	静川2	"	"	"		15,190	縄文
32	静川3	"	"	"		5,130	縄文
33	静川4	狩猟場	"	"	S54	7,680	縄文
34	静川5	集落跡・墳墓	"	S50	S59・H6・7	8,810	旧石器・縄文
35	静川6	集落跡・狩猟場	"	"	S59・H6	8,570	縄文・統縄文
36	静川7	遺物包含地	"	S53		7,550	縄文
37	静川8	集落跡・墳墓	"	S54	S54	18,110	縄文
38	静川9	狩猟場	"	"	S59・H2	10,060	縄文・統縄文
39	静川10	遺物包含地	"	"	"	1,223	縄文
40	静川11	"	"	S55		6,243	縄文
41	静川12	"	"	"		1,518	縄文
42	静川13	"	"	"		8,155	縄文
43	静川14	集落跡・狩猟場	"	"	S56	21,420	旧石器・縄文
44	静川15	遺物包含地	"	"	"	2,187	縄文
45	静 川	塚墓・集落跡	"	"	S57	18,234	縄文・統縄文・摩文
46	静川17	遺物包含地	"	"	S56	750	縄文・統縄文
47	静川18	"	"	"	"	2,144	縄文
48	静川19	狩猟場	"	"	S55	2,974	縄文・統縄文
49	静川20	"	"	"	"	2,687	縄文・統縄文
50	静川21	集落跡・狩猟場	"	"	"	2,544	縄文
51	静川22	集落跡・貝塚	"	"	S56・57	13,064	縄文・統縄文・アイヌ
52	静川23	遺物包含地	"	"	S56	2,770	縄文・統縄文
53	静川24	"	"	"	"	2,562	縄文・統縄文
54	静川25	集落跡・狩猟場	"	"	"	8,174	縄文・統縄文
55	静川26	"	"	"	S55	2,259	縄文・統縄文・摩文
56	静川27	遺物包含地	"	S57		9,000	縄文
57	静川28	"	"	"	"	3,200	縄文
58	静川29	集落跡・狩猟場	"	S59	S59	1,938	縄文
59	静川30	集落跡・狩猟場	"	"	"	9,375	縄文

表7 古東遺跡群一覧(2)

No.	遺跡名	種別	所在地	発見年	調査年	面積(m <sup>2</sup> )	時期
60	静川31	狩猟場	古小牧市	S59	S59	1,094	縄文
61	静川32	遺物包舎地	〃	〃	〃	750	
62	静川33	狩猟場	〃	〃	〃	3,375	縄文
63	静川34	〃	〃	〃	〃	5,245	縄文
64	静川35	〃	〃	〃	〃	3,281	縄文・アイヌ
65	静川36	〃	〃	S61		14,630	縄文
66	静川37	集落跡	〃	S61	H1・2・3	5,900	縄文・統縄文
67	静川38	遺物包舎地	〃	H1		720	縄文
68	柳館	集落跡・貝塚	〃	S36	S36・45	27,812	縄文
69	網木	墳墓	〃	S43	S46	5,120	縄文
70	亀谷	遺物包舎地	〃	S32		14,390	縄文・統縄文・弥文
71	二ナルカ	集落跡・貝塚	〃	—	S58・59・H5・6	13,550	縄文・統縄文・弥文
72	亀ヶ森1	遺物包舎地	〃	S55		6,637	
73	亀ヶ森2	〃	〃	〃		7,030	
74	亀ヶ森3	〃	〃	〃		2,587	
75	高安	〃	〃	〃		2,530	縄文
76	高井西1	〃	〃	〃		900	縄文
77	高井西2	〃	〃	〃		900	縄文
78	高井西3	〃	〃	〃		618	縄文
79	山岸	〃	〃	〃		3,655	縄文
80	山岸2	〃	〃	H10		12,000	
81	佐伯	〃	〃	S55		19,628	縄文
82	安藤沼1	〃	〃	〃		7,762	縄文
83	安藤沼2	〃	〃	〃		11,700	縄文・弥文
84	安藤沼3	〃	〃	〃		2,700	縄文
85	矢幅	〃	〃	〃		7,818	縄文
86	吉田	〃	〃	〃		1,440	縄文
87	吉田2	〃	〃	〃		3,960	
88	吉田3	〃	〃	H10		9,000	
89	長瀬	〃	〃	S55		2,416	縄文
90	遠浅1	墳墓・狩猟場	早来町	S50	S53	4,243	縄文
91	遠浅2	遺物包舎地	〃	〃	〃	14,437	縄文
92	遠浅3	〃	〃	S53		3,000	縄文
93	遠浅4	〃	〃	〃		3,062	縄文・統縄文
94	遠浅5	〃	〃	S62		16	縄文
95	源武1	〃	〃	S54		7,500	縄文
96	源武2	〃	〃	S55		6,242	縄文・弥文
97	源武3	〃	〃	〃		3,037	縄文
98	源武4	〃	〃	〃		13,950	縄文
99	源武5	〃	〃	〃		7,873	縄文・統縄文
100	源武6	〃	〃	〃		2,530	縄文
101	源武7	〃	〃	〃		2,755	
102	源武8	〃	〃	〃		4,500	縄文
103	源武9	〃	〃	〃		7,200	縄文
104	源武10	〃	〃	〃		505	
105	源武11	〃	〃	H10		41,000	縄文
106	厚真1	集落跡・狩猟場	厚真町	S48	S51	5,208	縄文
107	厚真2	狩猟場	〃	〃	S52	3,241	縄文
108	厚真3	〃	〃	〃	S53	6,366	縄文・統縄文・弥文
109	厚真4	遺物包舎地	〃	〃		13,463	縄文
110	厚真5	〃	〃	〃		62,559	縄文・統縄文
111	共和	墳墓	〃	—	S53	5,711	縄文・統縄文・弥文
112	厚真7	集落跡・墳墓	〃	S48	S52・53	7,185	縄文・統縄文
113	厚真8	〃	〃	〃	S52	6,829	縄文・統縄文
114	厚真9	遺物包舎地	〃	〃		510	縄文
115	厚真10	〃	〃	〃	S52	2,707	縄文
116	厚真11	〃	〃	S49		6,187	縄文
117	厚真12	墳墓	〃	S53	S54	13,124	縄文・統縄文・弥文
118	厚真13	狩猟場	〃	S55	S55	3,200	縄文・統縄文・弥文
119	浜厚真	遺物包舎地	〃	—			

表8 否裏理文調査の概末(1)

西曆	和曆	機 向	調 査	報 告 書	人	事
1973	昭和48年	7月 宮小牧東部工業地帯管理職 文化財分布調査表決定	8月 分布調査開始			7月 関係職員を2名採用
1974	昭和49年		「関係地区々区内市街防衛」調査 5/24～5/28 「東美地開拓移住農士の農跡」調査 11/18～11/20			
1975	昭和50年		千歳市美々貝塚 8/11～8/26	3月『宮小牧市録々「関係地区々区内市街防衛」調査結果報告書』42p		
1976	昭和51年	9月 宮小牧東部工業地帯管理職 文化財系調査表に改称 9月 宮小牧東部工業地帯管理職 文化財系調査表改称	豊川1遺跡 9/1～9/23 厚真1遺跡 9/13～11/19	3月『東美地開拓移住農士の農跡調査報告書』70p 3月『調査員録』56p	9月 関係職員1名、臨時職員2名採用	
1977	昭和52年		厚真2・7・8・10遺跡 5/6～10/13 城帯八木井遺跡 7/19～7/31			4月 臨時職員を3名採用
1978	昭和53年		遺跡1遺跡 5/10～7/17 共和遺跡 8/1～10/24 厚真3・7・10遺跡 5/11～11/11 本条町遺跡・厚真町共和地区 豊川台地南端開拓地調査 追分町遺跡1遺跡 10/14～10/16	3月『城帯八木井遺跡系調査報告書』126p	5月 工藤 肇 日本考古学協会会員	
1979	昭和54年		第1次石油調査基地分布調査 4/23～5/12 第1次北電送電線分布調査 6/12～7/26 豊川4・8遺跡 4/28～9/8 厚真3・12遺跡 8/23～10/31	3月『宮小牧市録々「関係地区々区内市街防衛」調査報告書』51p		
1980	昭和55年		厚真13遺跡 5/18～6/20 柏原18遺跡 6/18～9/18 柏原16遺跡 8/6～9/20 柏原19遺跡 5/13～5/15 豊川19～21・26遺跡 9/19～11/19	3月『追分町の埋蔵文化財』110p	5月 宮本博夫、藤沼浩一 日本考古学協会会員	
1981	昭和56年	4月 宮小牧市埋蔵文化財 センターに改称	田代平川水舟 3/28～3/30 追分町中平遺跡 4/30～5/2 豊川14・15・17・18・22～25遺跡 5/6～11/21			



表9 若東埋文調査の爾末(2)

西暦	和暦	動 向	調 査	査 査	報 告 書	人	事
1982	昭和57年		柏川17遺跡 5/10～6/16 静川116～22遺跡 5/10～10/26			4月市職員を3名採用	
1983	昭和58年		ニナルカ遺跡 5/29～6/23 静川9遺跡 6/18～7/14 クアゴブ遺跡 8/1～10/29		【静川遺跡一環立地時代の遺跡と集落】70p 3月【志分町中安平遺跡発掘調査報告書】60p		
1984	昭和59年	9月 遺跡調査 遺跡調査 遺跡調査	ニナルカ遺跡 5/11～5/21 静川15・8遺跡 5/18～10/7 静川29～35遺跡 6/18～11/13		3月【クアゴブ】306p		
1985	昭和60年	4月 志小牧市歴史文化財調査 センター 11月 志小牧市博物館開設	ウエニナイ2遺跡 1/28～2/2		3月【ニナルカ】182p 3月【ウエニナイ2遺跡】12p		
1986	昭和61年		静川16遺跡史跡指定範囲調査 5/12～6/3 柏原2遺跡 6/24～7/27 赤天貝塚 7/29～8/7		3月【志小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ】250p 8月【静川16遺跡発掘調査報告書】39p 12月【柏原2遺跡】137p		
1987	昭和62年	1月 静川16遺跡【静川遺跡】 として国指定史跡となる 5月 全国公立埋文調査文化財セン ター選定協議会設立	赤天貝塚 7/29～8/26 三石町ショップ遺跡 9/22～10/26		3月【志小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ】479p 3月【赤天貝塚Ⅰ】121p		
1988	昭和63年		赤天貝塚 7/29～8/10 柏原4遺跡 8/20～10/28 北田町入江遺跡 10/31～11/3		3月【赤天貝塚Ⅱ】96p 3月【ショップ遺跡】100p		
1989	昭和64年		北田町入江遺跡 9/18～10/2 静川137遺跡 10/11～11/10		3月【柏原4遺跡】148p 3月【赤天貝塚Ⅱ】176p		
1990	平成2年		静川9遺跡 5/10～8/18 静川137遺跡 9/11～10/24 高正江遺跡 10/12～10/25		3月【志小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ】489p 3月【入江遺跡】140p 12月【高正江遺跡】26p		
1991	平成3年		赤石11遺跡 6/7～8/31 柏原6遺跡 6/14～10/8 静川137遺跡 9/1～10/31 柏原2遺跡 10/9～11/16		3月【静川9遺跡】77p	5月 赤石第三・二跡発掘也 日本考古学協会委員	
1992	平成4年		柏原5遺跡 5/12～11/14 英沢11遺跡 5/15～10/29		1月【志小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ】369p 3月【静川137遺跡】146p	4月 若東埋文調査 6月 若東埋文調査 日本考古学協会委員	

表10 吾東理文調査の概末 (3)

西暦	和暦	動 向	調 査	報 告 書	人 員	考
1993	平成5年	9月 全国公立理文文化財センター運営協議会役員候補	柏原5遺跡 ニナルカ遺跡 5/11~11/2 奥沢東4・5・6遺跡 5/11~10/29	3月『奥沢11遺跡』196p	4月 市職員3名を雇用	
1994	平成6年		結原10遺跡 ニナルカ遺跡 6/14~8/19 6/14~8/19 静川5・6遺跡 8/17~10/22 奥沢10遺跡 8/19~10/28 奥沢東6遺跡 8/2~11/2 湯分町ポンアピラ2遺跡 10/18~10/23			
1995	平成7年		奥沢東6遺跡 奥沢10遺跡 5/19~10/28 5/24~10/13 静川5遺跡 5/28~10/19	1月『ポンアピラ2遺跡』50p 11月『吾小牧東部工業地帯の遺跡群V』462p		
1996	平成8年		結原10遺跡 奥沢東6遺跡 奥沢10遺跡 奥沢東6遺跡 奥沢東10遺跡 奥沢東10遺跡 奥沢東10遺跡 5/17~9/28 5/24~7/28 奥沢東10遺跡 8/1~10/31			
1997	平成9年		白雲町成沢浜2遺跡 5/7~10/29	3月『結原5遺跡』891p 3月『ニナルカ遺跡』83p 9月『奥沢10遺跡』120p		
1998	平成10年	吾小牧東部調査(株) 建設	白雲町ポンアピラ4遺跡 えりも町油跡遺跡 5/9~10/30 9/1~10/31	3月『奥沢東遺跡群』269p 9月『結原27・ニナルカ・静川5・6遺跡』590p	4月 科学センター、国県、中央図書館へそれぞれ1名が異動	
1999	平成11年	5月 全国公立理文文化財センター運営協議会開催	えりも町油跡遺跡 5/7~10/8	9月『成沢浜2・ポンアピラ4遺跡』244p		
2000	平成12年		藤川町赤塚3遺跡 5/18~6/12	3月『結原遺跡』176p 9月『奥沢3遺跡』85p		
2001	平成13年	文化庁文化財補助事業による発掘調査 発掘調査結果地域雇用特別対策推進事業による管理			9月 佐藤一夫 定年退職	
2002	平成14年	4月 吾小牧市理文文化財調査センター一統管理小		3月『吾小牧東部工業地帯の遺跡群VI』411p 『吾小牧東部工業地帯の遺跡群VII』401p 『吾小牧東部工業地帯の遺跡群VIII』452p 『吾小牧東部工業地帯の遺跡群IX』831p 『吾小牧東部工業地帯の遺跡群X』181p	3月 草土清夫 定年退職 4月 中央図書館、博物館、総合体育館へそれぞれ1名が異動	

表11 苫東埋文調査の経費

(円)

年度	種別	原因者	苫 東 K K	開 建	調 査 遺 跡
48	分布調査		12,369,000		
49	"		12,360,415		
50	"		15,399,949		
51	発掘調査		12,467,000		S-1 A-1
52	"		28,781,000		A-2. 7. 8. 10
53	"		35,436,266		T-1 A-3. 7. 10 共和
54	"		20,051,387		S-8 A-3. 12
55	"		21,756,540		A-13 K-16. 18 A-9~21. 26
56	"		20,633,753		S-14. 15. 17. 18 22~25
57	"		22,369,482		K17. S-16. 22
58	"		22,499,254	64,746,689	S-9 ニナルカ. タブコブ
59	"		20,656,000	63,820,000	S-5. 6. 29~35 ニナルカ
60	"		18,760,000		
61	"		21,098,000	6,597,000	S-16 K-24
62	"		21,190,000		
63	"		21,522,000		
H1	"		36,709,886		S-37
H2	"		11,985,984		S-9. 37
H3	"			236,383,733	K-5. 27 M-11 S-37
H4	"			203,808,315	K-5 ニナルカ M-11
H5	"			503,370,152	K-5 ニナルカ ME-4~6
合計			376,045,916	1,078,725,889	

M=美沢 A=厚真 S=静川  
ME=美沢東 T=遠浅 K=柏原

野村 崇

(元北海道開拓記念館学芸部長)

a 私の考古遍歴

- ・自己紹介にかえて

b 1955年～1965年前後までの馬追丘陵周辺の主要調査概要

(1) 長沼町タンネットウ遺跡

夕張郡長沼町幌内2274-1他(長浜洋一氏他)

1957(昭和32)年……第1次調査(分布調査)

1958(昭和33)年……第2次調査(A地区・B地区・名取武光氏担当)

1961(昭和36)年……第3次調査(B発掘区・吉崎昌一氏担当)

A発掘区 発掘面積27m<sup>2</sup>、縄文晩期、タンネットウL式

B発掘区 発掘面積16m<sup>2</sup>、縄文早期、タンネットウE式

遺跡の概要

長沼町の東部に横たわる馬追丘陵の西斜面、幌内18区の海拔40～68mの中段段丘上に、約2万m<sup>2</sup>にわたってひろがる。発掘調査は1957・58・61年(昭和32・33・36)の3回にわたり、札幌西高校郷土研究部により行れた。発掘当時、遺跡西端の高台に立てば、茫漠たる石狩低地帯が一望のもとに収めることができ、今は干拓によって失われた馬追沼・長都沼を見ることができた。

発掘地点はA・Bの2発掘区に分かれ、両者は約40m離れている。A区からは、晩期終末の大洞A式に比定できるタンネットウL式土器が出土し、B区からは早期の東銅路Ⅲ式に比定できるタンネットウE式土器が検出された。本遺跡の調査は、石狩低地帯の縄文早期および晩期編年において、新型式を設定しただけでなく、とりわけ晩期のタンネットウL式土器の設定と細分化は、亀ヶ岡式系土器群分布圏周縁における「非大洞系土器群」を分ける上で重要な役割を果たした。

\*野村崇「長沼町タンネットウ遺跡の調査」1977、空知地方史研究協議会。

(2) 長沼町堂林遺跡

夕張郡長沼町幌内2008他(堂林克美氏他)

1960(昭和35)年4月、9月 長沼町教育委員会主催(吉崎昌一氏担当)

A～D地区 66m<sup>2</sup>を発掘、縄文時代後期末葉

遺跡の概要

本遺跡の調査は、昭和35年4月1日から5日までと、同年9月1日から10日までの2回にわたって、長沼町教育委員会のもとに、吉崎昌一氏が担当者となって実施したものである。発掘の主体は、札幌西高等学校郷土研究部OB会があたり、昭和42年3月に報告書が刊行されている。

発掘によって出土した土器は、第1群土器とした土器と、斜行縄文あるいは羽状縄文を地文とし、口縁部に内側から外に突いて、表面に小さな瘤を作る土器と、第2群土器とした地文の縄文の上に沈線文、渦巻文、曲線文などの文様が描かれる精製土器からなりたっている。

石器は、有茎の石鏃、石斧、石槍、異形石器、石棒の頭部などがあり、また拳大の黒曜石原石を5個積み上げた遺構などが検出されている。

本遺跡出土の一括土器をもとにして、「堂林式土器」が設定された。所屬時代は、縄文時代後期の手稲式および、これに後続するエリモ遺跡B地点出土の土器と、御殿山式土器の間を埋めるものとして、縄文時代後期末に位置づけた。

\*野村 崇・宇田川洋「長沼町榎内堂林遺跡調査報告」長沼町教育委員会、昭和42年3月。

### (3) 栗山町鳩山第3遺跡

夕張郡栗山町字湯地48-6 (養口寿宅氏)

1963 (昭和38) 年7月、夕張東高校・札幌西高校郷土研究部

縄文時代晩期末葉

#### 遺跡の概要

本遺跡は、夕張川の支流の一つであるポンウェンベツ川に向かって張り出した舌状台地の南斜面に立地する。発掘調査は、昭和38年7月25日から31日まで夕張東高校・札幌西高校の各郷土研究部、栗山町社会科サークルの三者が共催となり、藤本英夫氏の担当のもとに実施したものである\*。発掘地点は松林の樹間になっているため、1m×1m単位の発掘溝を合計13m<sup>2</sup>にわたって発掘した。表土をはぎ、黄褐色土を15cmほど剝離したところ、円形の掘り返しが認められ、さらに掘り進めると、赤褐色土層の下部から粘土層にかけて、長軸1m、短軸80cmの楕円形ピットの掘り込みが明瞭に確認できた。積石はなく、準大の石が数個不規則にあっただけで意識的な配石はなかった。ピットの上部には、土器破片が、かためて置かれたかのように多量に検出された。ピットの底面からは、無茎の石鏃が40本と石斧、スクレイパー、砥石、軽石製の有溝研磨器、黒曜石の原石、それと人骨片などが出土した。ピットの底面で火を燃やしたのか、底面は移植べらでたたくと音がするほどであった。また底面出土の遺物は、いずれも焼けていた。土器は土壌の底面およびその付近から完形になるもの4個、破片にして4,143点を数える。これらの破片のなかには、硬化した工字文をもつ精製の大洞系土器があり、タンネトウⅠ式土器に後続する縄文晩期末の時期の所産である。

\*野村 崇「北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡」『石器時代』7所収、昭和40年10月

### (4) 由仁町東三川遺跡

夕張郡由仁町字三川298番地 (加藤龍雄氏)

1964 (昭和39) 年11月 第1次調査

1965 (昭和40) 年10月 第2次調査

1966 (昭和41) 年10月 第3次調査

発掘総面積76m<sup>2</sup>、縄文時代後期末～晩期初頭の土壌墓、遺物包含層

#### 遺跡の概要

夕張川が滝ノ下から流路を北にとると、夕張山地と西の馬追丘陵との間にやや開けた盆地性の平野が広がる。本遺跡は、この小盆地のなかを北流する夕張川の西岸、馬追丘陵から続く丘陵東斜面に立地している。海拔高度は73mである。

遺跡の背後には、比高8mほどの段丘崖があり、その崖下に豊富で良質な湧水が湧き出し、地主の加藤家の飲料水となっていたが、現在は涸れている。

本遺跡が知られたのは、1963 (昭和38) 年9月に行った野村らの遺跡分布調査の際に、東三川小学校に寄贈された本遺跡出土の土器に注意して以来である。

由仁町教育委員会では、1964 (昭和39) 年11月2日、3日の第1次調査、1965 (昭和40) 年10月9

日、10日の第2次調査、1966（昭和41）年10月8日～10日の第3次調査と、3ヵ年間にわたって継続し、合計76m<sup>2</sup>の面積を発掘した。遺構は、墓墳と考えられる直径80cm前後のピットが2基検出された。本遺跡の主体となる土器は、地文の縄文が付された上に、裏から棒で突いて作る突瘤文、爪形文、刺突文などのつけられた深鉢形土器と、浅鉢、壺、注口などに施文された各種の渦巻文、沈線文、曲線文それに彫去された三叉文などが伴う。そのほかに、滑車形耳飾などの土製品もある。

石器としては、石鎌、石小刀、石槍、削器、搔器、石斧などが出土した。本遺跡は、出土した土器からみて、彫去された三叉文のあることなどから、大洞B式土器に比定し、縄文時代晩期の最初頭の時期とした。

\*野村 崇「由仁町東三川遺跡」『北海道由仁町の先史遺跡』所収、由仁町教育委員会 昭和44年3月

#### (5) 由仁町岩内遺跡

夕張郡由仁町字岩内501-8、(石川博継氏)

1966（昭和41）年7月 第1次調査

1967（昭和42）年8月 第2次調査

縄文時代初頭 竪穴住居跡、2軒、発掘面積約120m<sup>2</sup>

#### 遺跡の概要

本遺跡は、夕張川が滝ノ下付近から流路を北にかえて、馬追丘陵の中央東側に流下するあたり、すなわち、国鉄室蘭本線古山駅より東北東に約4km行った河岸段丘（海拔48m）上に立地する。本遺跡は、雑木林のなかにある地表面のくぼんだ三軒の竪穴住居跡であり、地主の石川幸太郎氏によって永年保存されてきたが、川端ダムの完成により水田化がすすみ、本遺跡のすぐ背後までせまってきた。また、溜池工事造成の際に1号住居跡の約2/3が削られたという事象もあって、由仁町教育委員会では2ヵ年計画で1号および2号住居跡の発掘調査と地形実測図等の作成を計画し、3号住居跡の永久保存をはかることとした。

発掘調査は、由仁町教育委員会が主催し、野村崇が発掘担当者となり、夕張東高校・札幌西高校郷土研究部・北海道教育大学の生徒・学生の参加により、第1次調査は、1966（昭和41）年7月25日から27日まで、第2次調査は、1967（昭和42）年8月17日～21日までの2回にわたって実施された。その結果については、すでに報告されているので、ここではその概要のみを記す。

#### 1号住居跡

雑木林内に、南北に一列に並ぶ住居跡群中、一番北に位置するものである。発掘前に土砂採取のため、半分近くがこわされていた。完掘後の北東-南西を指す南東壁の長さは5.6mを測り、住居跡最大長は中央部で6m弱である。カマドは南東壁の中央よりやや北東寄りに残存していた。構造は南西側に白色粘土、北東側に自然石を用い、煙道は壁に穿っていない造りつけの一形式をとっている。柱穴様のピットは3個認められた。

本住居跡から出土した遺物は、環形土器と小形の鉢形土器、1/3が欠けた土製紡錘車である。他に腐蝕の進んだ鉄器片が出ている。

#### 2号住居跡

完掘後の大きさは、北東-南西をさす北西壁の長さが4.4m、北東壁は4mあり、隅丸方形である。壁の高さは30～50cmである。カマドは、南東壁の中央より南寄りに残存していた。構造は石組であったと考えられるが、解体されて焚口付近や住居跡南隅にあった。煙道は、南方向に向いている。その長さは、ほぼ100cmであった。柱穴と考えられるピットは5本検出された。住居跡の東西南北のコーナー

寄りと中心部の5本である。

出土遺物は5点の環形土器と胴部以下が欠損した甕形土器、小形土器の底部などである。また壺形土器が1号址のカマドより南東へ約2mのところの旧地表面と考えられるところから一括発見された。

本遺跡出土の遺物は、1号および2号住居址とともに、環形土器の胴の中位に1条の段を有する点や壺形土器の肩部にも明瞭な段をもつ点などから考えて、東北地方の桜井第1型式に対比できるおよそ8世紀頃の土師器の一環と考えてよいであろう。

\*宇田川洋「由仁町岩内遺跡」「北海道由仁町の先史遺跡」所収、由仁町教育委員会、昭和44年3月

### c 総括

- ・1960年前後の北海道考古学界
- ・馬追丘陵遺跡群調査の果たした役割
- ・まとめて代えて



由仁町 東三川遺跡にて



由仁町 岩内遺跡



長沼町 幌内神社境内



長沼町 タンネットウ遺跡 (左手の林に湧水がある。)

## 4 研修・研究会等

### (1) 研修・研究会等

- \*平成14年度北海道文化財・埋蔵文化財担当者会議（札幌市）4月18日～4月19日  
西田・菅野・越田（賢）・長沼・藤原
- \*日本考古学協会2002年度総会（東京） 畑5月25日～5月26日
- \*平成14年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会  
総会（栃木） 西田・阪口6月13日～6月14日  
北海道・東北ブロック会議（常呂町） 越田・阪口9月11日～9月12日  
北海道・東北地区コンピューター等研究委員会（山形）9月26日～9月27日  
西田・倉橋  
北海道・東北地区会議（岩手） 西田・吉田・菅野10月10日～10月11日  
研修会（石川） 小鹿・小笠原10月17日～10月18日  
役員会（東京） 宮崎・吉田11月18日～11月19日  
海外研修（中国） 畑・皆川・村田11月26日～12月3日
- \*「埋蔵文化財写真技術研究会」（奈良） 吉田7月5日～7月6日
- \*第5回東北保存科学研究会（福島） 田口7月20日～7月21日
- \*日本第四紀学会2002年大会（長野） 花岡8月23日～8月25日
- \*平成14年度第1回埋蔵文化財担当職員等講習会（大阪） 礪田・小杉9月9日～9月10日
- \*平成14年度アイヌ民俗文化財専門職員等研修会（札幌市） 佐藤（剛）10月2日～10月4日
- \*奈良文化財研究所 埋蔵文化財発掘技術者特別研修（奈良）  
「測量外注管理課程」 村田10月9日～10月11日  
「自然科学的年代決定法課程」 直江11月12日～11月15日
- \*南北海道考古学情報交換会（森町）11月30日～12月1日  
越田（賢）・柳瀬・大泰司・中山
- \*保存科学研究会（奈良） 三浦・田口12月20日
- \*第16回東北日本の旧石器を語る会（山形） 長沼12月21日～12月22日

### (2) 遺跡見学会等協力

- \*平成13年度遺跡報告会（センター研修室）4月21日
- \*白滝村白滝遺跡群遺跡見学（白滝村上川小35名）6月7日
- \*恵庭市西島松5遺跡体験発掘（札幌市立曙小6年36名）6月18日
- \*根室市穂香壱六群遺跡見学（根室市博物館開設準備室主催史跡見学会27名）6月23日
- \*鷗川町宮戸4遺跡体験発掘（札幌市立美園小109名）6月26日
- \*千歳市オルイカ1遺跡体験発掘（札幌市立苗穂小87名）7月23日
- \*森町濁川左岸遺跡見学（南北海道情報交換会20名）7月13日
- \*森町倉知川右岸遺跡体験発掘（七飯町歴史館ジュニア探検クラブ36名）7月26日
- \*西島松5遺跡見学（北海道浅井学園大学56名）7月31日



- \* オルイカ1 遺跡見学 (第31回北海道高等学校地理教育研究会全道研究大会) 8月2日
- \* 穂香壑穴群体験発掘 (「チャレンジふるさと根室探検隊」) 8月9日
- \* 石狩市対雁2 遺跡体験発掘 (稚内市立上勇知中) 9月5日
- \* 穂香壑穴群見学 (中標津町立中標津東小) 9月11日
- \* 穂香壑穴群見学会 (根室市博物館開設準備室主催穂香壑穴群発掘見学会) 9月28日
- \* 穂香壑穴群見学 (根室管内高等学校教育研究会) 10月17日

### (3) 部内研修・報告会

- \* 平成14年度現地研修会 (千歳市・長沼町・由仁町・恵庭市) 9月5日～9月6日  
 講師 佐藤一夫 勇武津資料館館長 「苫東埋文調査の顛末」  
 野村崇 元北海道開拓記念館学芸部長 「馬追丘陵における1960年前後の遺跡調査」
- \* 平成14年度現地調査報告会 (センター研修室) 11月21日

### (4) 派遣・講演依頼

- \* 電力活用札幌地区協議会 講演 6月6日  
 《講師》越田(賢)
- \* 第1回紋別市立博物館歴史講座 「旧石器時代～白滝・紋別・北海道」 6月13日  
 《講師》長沼
- \* 札幌市教育研究協議会 「夏の研究集会」 6月25日  
 《講師》長沼
- \* 保存処理指導 泊村教育委員会 6月27日～6月28日  
 《派遣》田口
- \* 青森県史編さん事業 「青森県史資料編古代2出土文字資料」(仮題) カード作成依頼 鈴木(信) 7月8日
- \* 子ども考古調査隊 小樽市教育委員会 石器作り 8月3日  
 《講師》長沼
- \* 平成14年度第1回体験学習教室 白滝村 石器作り 8月31日  
 《講師》長沼
- \* 第5回だて噴火湾縄文まつり 縄文シンポジウム 9月7日  
 《派遣》畑
- \* 平成14年度札幌市民族教育に関する研修会 (第II期) 9月19日  
 《講師》越田(賢)
- \* 平成14年度社会科・地理歴史科教育研修講座 北海道立教育研究所 10月1日  
 「博物館等の活用を図る授業改善の在り方」  
 《講師》西田
- \* 酪農大学教職課程履修講義 「総合演習」ーオホーツク文化の探求 (センター研修室)  
 《講師》西田 10月7日  
 《講師》種市 12月9日  
 《講師》越田(賢) 12月16日
- \* 第25回特別企画展 「120年より前の帯広」 帯広百年記念館 10月19日

- 《講師》越田（賢）
- \*文化財講演会 白滝村 「白滝遺跡群の調査と成果について」 10月22日  
《講師》長沼
  - \*富良野市博物館歴史講演会 「北海道の旧石器文化の研究事情」 11月10日  
《講師》畑
  - \*遺跡学会をめざした、遺跡の保存と活用に関する研究集会（奈良） 11月21日～11月22日  
《派遣》畑

#### (5) 研究協力

- \*「発掘された日本列島展2001」「発掘された日本列島展2002」実行委員会（東京） 3月11日  
《出席》越田（賢）・愛場
- \*「発掘された日本列島展2003」実行委員会（東京） 12月9日  
《出席》越田（賢）・倉橋
- \*平成14年度恵庭市カリンパ3遺跡整備検討委員会委員委嘱 4月1日～平成15年3月31日  
《派遣》畑 7月3日、7月10日、7月17日、11月14日
- \*史跡標準遺跡群 天然記念物標準湿原整備委員会アドバイザー 5月24日～平成16年3月31日  
《派遣》畑 8月27日、11月4日
- \*史跡等整備調査委員会委員の就任 網走市教育委員会 6月10日～平成15年3月31日  
《派遣》畑 6月25日～6月27日、10月24日
- \*「北海道の文化」編集委員委嘱 北海道文化財保護協会 平成14年6月7日付  
《派遣》越田（賢） 6月21日
- \*「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究」協力者会議（東京）  
《出席》長沼 5月30日～5月31日、8月27日～8月28日、11月21日～11月22日
- \*共同研究員の委嘱 新潟県立歴史博物館調査研究事業 総合研究「日本古代の辺境の様相」のため  
10月1日～平成15年3月31日  
《派遣》中田 11月16日～11月17日

## 5 平成14年度資料の貸出

提供先	目的	資料名・内容
千歳市立向陽台中学校 草野修	社会科教材	遺物－キウス5遺跡出土土器1ケース
仙台市富沢遺跡保存館館長	平成14年度特別展 5月27日～10月11日	遺物－白滝遺跡群・柏台1遺跡・ユカンボシ C15遺跡出土資料
朝日新聞社出版局	週刊朝日百科に掲載	フィルム－白滝遺跡群航空写真ほか3点
山川出版社	日本史リブレットに掲載	フィルム－柏台1遺跡出土細石刃核ほか7点

提供先	目的	資料名・内容
白滝村教育委員会	パンフレットに掲載	フィルム-白滝遺跡出土石器写真9点
八雲町教育委員会	八雲町での展示	フィルム-シラリカ2遺跡近景写真ほか4点
白老町仙台藩 白老元陣屋資料館	資料館報に掲載	フィルム-虎杖浜2遺跡写真4点
NHK	TV放送に使用	フィルム-青苗砂丘遺跡遠景ほか6点
白滝村教育委員会	村政要覧に掲載	フィルム-白滝遺跡出土石器写真9点
北海道映像記録	DVDソフトに使用	フィルム-美々4遺跡土偶ほか11点
岩波書店「科学」編集部	雑誌掲載	フィルム-白滝遺跡群ほか5点
北海道考古学会会長	ポスターなど	フィルム-ウサクマイN遺跡ほか20枚
風土文化社	単行本掲載	フィルム-忍路土場遺跡1枚
仙台市富沢遺跡保存館館長	展示・図録掲載	フィルム-白滝遺跡群遠景ほか7枚
北海道地域文化保存振興協 会理事長	機関紙掲載	フィルム-北海道埋蔵文化財センター全景ほ か1枚
国立歴史民俗博物館 春成秀爾	単行本掲載	フィルム-美沢1遺跡JX-4調査状況
大湯ストーンサークル館 館長	情報検索システム	フィルム-美沢1遺跡JX-3調査状況ほか6 枚
北海道東海大学学生 坂本大亮	卒業研究(デザイン)	フィルム-美々4遺跡動物型土製品ほか17点
碧水社代表取締役 清水淳郎	単行本掲載	フィルム-ママチ遺跡出土土製仮面1枚
講談社学芸局長 柳田和哉	単行本掲載	フィルム-柏台1遺跡出土遺物ほか2点
山川出版社	単行本掲載	フィルム-キウス4遺跡復元模型1枚
朝日新聞社編集部	週刊朝日百科に掲載	フィルム-桔梗2遺跡シャチ形土製品1枚
朝日新聞社編集部	週刊朝日百科に掲載	フィルム-忍路土場遺跡出土ホッケマ式土器 1枚
ビュー企画 代表取締役柴田周作	ビデオ解説冊子に掲載	フィルム-キウス4遺跡復元模型ほか2枚
碧水社代表取締役 清水淳郎	単行本掲載	フィルム-美々4遺跡出土ヒスイネックレス ほか2枚
毎日新聞報道部江別 吉田 競	新聞掲載	フィルム-青苗砂丘遺跡人骨出土状況ほか
北海道新聞社出版局 藤崎貞信	単行本掲載	フィルム-滝里33遺跡出土コハク玉1枚
北海道新聞社出版局 藤崎貞信	単行本掲載	フィルム-忍路土場遺跡関係40枚
相模原市立博物館館長 安立武晴	リーフレットおよび解説 パネル	フィルム-白滝遺跡群出土石器ほか8枚
小川忠博	未定	遺物-美々4遺跡出土小型土器ほか

## 6 平成14年度刊行予定報告書

- 第178集 【恵庭市 西島松 5 遺跡】  
 柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第179集 【恵庭市 西島松 9 遺跡】  
 柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第180集 【千歳市 キウス 4 遺跡 (9)】  
 北海道横断自動車道 (千歳～夕張) 埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第181集 【八雲町 落部 1 遺跡】  
 北海道縦貫自動車道 (七飯～長万部) 埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第182集 【森町 本内川右岸遺跡】  
 北海道縦貫自動車道 (七飯～長万部) 埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第183集 【八雲町 野田生 1 遺跡】  
 北海道縦貫自動車道 (七飯～長万部) 埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第184集 【根室市 穂香壱穴群 (2)】  
 一般国道44号根室市根室道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第185集 【鶴川町 米原 4 遺跡 (2)・宮戸 4 遺跡 (2)】  
 日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第186集 【厚真町 浜厚真 3 遺跡】  
 日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第187集 【千歳市 キウス 4 遺跡(10)】  
 北海道横断自動車道 (千歳～夕張) 埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第188集 【千歳市 オルイカ 1 遺跡】  
 一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第189集 【千歳市 オルイカ 2 遺跡】  
 一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第190集 【森町 濁川左岸遺跡】  
 北海道縦貫自動車道 (七飯～長万部) 埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第191集 【森町 本茅部 1 遺跡】  
 北海道縦貫自動車道 (七飯～長万部) 埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第192集 【千歳市 ユカンボシC 15遺跡 (6)】  
 北海道横断自動車道 (千歳～夕張) 埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第193集 【江別市 対雁 2 遺跡 (4)】  
 石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

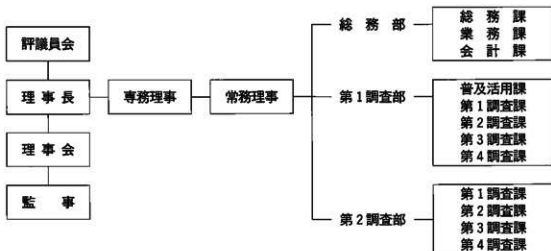
## 7 組織・機構

### 役員（平成14年7月1日現在）

理事長	森重 権一	
専務理事	宮崎 勝	
常務理事	畑 宏明	
理事	朝野 隆	北海道札幌東高等学校長
理事	石林 清	北海道教育文化協会理事長
理事	岡田 宏明	北海道北方民族博物館長
理事	菊池 俊彦	北海道大学教授
理事	北川 芳男	日本地質学会名誉会員
理事	田端 宏	道都大学教授
理事	蜂谷 光雄	由仁町教育委員会教育長
監事	佐藤 一夫	苫小牧市勇武津資料館長
監事	村山 邦彦	北広島市教育委員会委員長

### 評議員（平成14年7月1日現在）

評議員	加藤 邦雄	札幌市市民局生活文化部文化財課長
評議員	木田 勇	北海道教育庁生涯学習部文化課長
評議員	小林 真人	財団法人北海道開拓の村学芸課長
評議員	昌子 守彦	酪農学園大学教授
評議員	高澤 正良	北海道教育庁生涯学習部生涯学習推進局長
評議員	鶴丸 俊明	札幌学院大学助教授
評議員	永井 秀夫	北海道大学名誉教授
評議員	西村 守	北海道教育庁企画総務部教育政策課長
評議員	山下 巖	岩見沢市立上幌向中学校長
評議員	山田 和広	網路市教育委員会教育長



## 8 職 員 (平成14年7月1日現在)

### 総務部

総務部長	○下村 一久	業務課長	小鹿正芳
総務課長	○阪口 博治	主 査	葛西宏昭
主 査	菅野 聡	主 任	中村貴志
主 任	小杉 充	参 与	市原祺清
主 任	小笠原学	会 計 課 長	吉田貴和子
参 与	金谷英男	主 査	礪田千秋
技 師	小笠原貞夫	主 事	今本宏信

### 第1調査部

第1調査部長(兼務)	○畑 宏明
普及活用課長	○越田賢一郎
主 査	藤本昌子
主 査	皆川洋一
主 任	倉橋直孝
主 任	○藤原秀樹
第1調査課長	立川トマス
主 査	花岡正光
主 査	田口 尚
第2調査課長	○樋市幸生
主 任	菊池慈人
主 任	藤井 浩
主 任	新家水奈
主 任	坂本尚史
主 任	福井淳一
文化財保護主事	柳瀬由佳
第3調査課長	○長沼 孝
主 査	越田雅司
主 任	愛場和人
主 任	鈴木宏行
主 任	立田 理
文化財保護主事	広田良成
文化財保護主事	直江康雄
第4調査課長	遠藤香澄
主 査	鎌田 望
主 任	○中田裕香
主 任	笠原 興
主 任	芝田直人
文化財保護主事	山中文雄

### 第2調査部

第2調査部長	西田 茂
第1調査課長	佐藤和雄
主 任	土肥研晶
主 任	佐藤 剛
文化財保護主事	石井淳平
第2調査課長	佐川俊一
主 査	和泉田毅
主 任	末光正卓
主 任	阿部明義
主 任	富永勝也
第3調査課長	熊谷仁志
主 査	谷島由貴
主 任	村田 大
主 任	中山昭大
主 任	影浦 覚
主 任	袖岡淳子
文化財保護主事	大泰司統
第4調査課長	三浦正人
主 査	鈴木 信
主 任	○西脇对名夫
文化財保護主事	吉田裕史洋
文化財保護主事	酒井秀治

○：北海道教育庁の派遣職員

---

調 査 年 報 15

平成14年度

---

平成15年 1月28日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 江別市西野幌685-1  
TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238  
URL <http://www.domaibun.or.jp/>  
E-mail [mail@domaibun.or.jp](mailto:mail@domaibun.or.jp)

印 刷 興国印刷株式会社  
〒060-0041 札幌市中央区大通東 3  
TEL 011-252-2221・FAX 011-252-2229

---